ULTIMATE ADVENTURES™

アルティメイト・アドベンチャーズ

日本版

No.1
Vol.61,
January
1993

今月の超ドッキリ企画

驚きの新連載！ 大秘境探検レポート
"雷竜の谷"

エリオット・ラフキン教授の
サベージ・エンパイア
原始帝国
"イーオドン"の植物と動物

ワイルド・ベイスン探検隊帰還す！

ORIGIN

SONY CANYON

ULTIMATE Adventures™ 日本版

Volume 61, January 1　1993年1月号

Contents

From Editors 3
読者からのレターズ 4

雷竜の谷　第1話
アバタール 8

イーオドンの谷の動植物に関する考察
エリオット・ラフキン 24

部族の武器 28
トーテムと捧げ物 32

ワイルド・ベイスン探検隊帰還す
ジミー・マローン 40

表紙

表紙イラストは諸事情により日本版独自のものを使用しております。ULTIMATE ADVENTURES英語オリジナル版の愛読者の方も今回はこちらのイラストでお楽しみください。

アルティメイト・アドベンチャーズ
発行／㈱オリジン・システムズ　㈱ポニーキャニオン
本誌内容のほとんどは架空のものです。本誌記事の無断複写、無断転載は固くお断りします。これが守られなかった場合は、本誌よりティラノサウルスを派遣し、あなたのお母さんに向かってけしかけさせます。Ultimate AdventuresおよびAvatar、Worlds of Ultima、The Savage Empireはオリジン・システムズの商標です。Ultima、Lord BritishはRichard Garriottおよびオリジン・システムズの商標です。でも、こんなとこ誰が読むのかしら？

ORIGIN™

アルティメイト・アドベンチャーズ・スタッフ

エグゼクティブ・プロデューサー
Richard Garriott

プロデューサー
Jeff Johannigman

ディレクター
Stephen Beeman

ストーリー製作
Aaron Allston

プログラム
Stephen Beeman, Bob Quinlan, Jason Templeman

ウルティマ・ゲームシステム製作
Cheryl Chen, John Miles, Herman Miller, Gary Scott Smith

ワールド設定
Stephen Beeman, Jeff Dee, Jeff George, Bob Quinlan, Jason Templeman, John Watson

会話製作
Aaron Allston, Philip Brogden

考 証
Karen E. Bell, PhD

美 術
Keith Berdak, Dan Bourbonnais, 'Manda Dee

美術協力
Jeff Dee, Glen Johnson, Jason Templeman, John Watson

音楽製作
"The Fat Man" George Alistair Sanger

サウンド・エフェクト
Marc Schaefgen

品質テスト
Philip Brogden, Steve Cantrell, Greg Paul Malone II, Mike Romero
Marc Schaefgen, Jeff Shelton, Scott Shelton, Brian Tomkins, John Watson

パッケージイラスト製作
Denis Loubet

解説書
Aaron Allston

解説書イラスト
Keith Berdak, 'Manda Dee

パッケージおよび解説書デザイン
Chery Neeld, Craig Miller

〈日本版スタッフ〉

プロデューサー
Katsunori Unakami

ディレクター
Yasuhiro Kawashima

プログラム
Masashi Yamaguchi

翻 訳
Tetsuo Kanai

美 術
GRAFFITI LAB, Kyoko Tahara, Emiko Yamaguchi

音 楽
Masayuki Nii

品質テスト
Hideo Mochizuki, Masazumi Kawabe, Ryousuke Kutsumo, Toshimori Kudou, Tsunenobu Suzuki

今号のアルティメイト・アドベンチャーズは〝失われし物の発見〟特集号です。と言っても、消えた手荷物を探し出して嘆り狂う搭乗客に届ける新商売を始めた、というわけではありません。私たちの発見はもっと高い次元にあります。〝失われし物の発見〟とは、冒険の旅であり、一度は失われ、再び無傷で発見された文化のことなのです。

この号の冒頭を飾るのは、新連載、アクションと危険と神秘に満ちたノンフィクション冒険記「雷竜の谷」です。

この著者について、私たちはあえていつもの方針を曲げて本人の身元を伏せさせていただきました。本人の希望により〝アバタール〟というペンネームを使用しています。ここで著者についてお教えできるのは、自ら身元を明かしたがらないという点で現代的な冒険家ではあるが、私たちが見聞きしているここ数年間の彼の実績から、勇気と機知と誠実さには十分に信頼が置ける人物であるということだけです。彼のファンタスティックなレポートを裏付ける物的証拠は、今のところ何ひとつ見つかっていません。しかし、彼自身の実績とここに書かれている冒険に本誌記者ジミー・マローンが同行しているという事実から、私たちはこの物語を真実であると断定しました。

この物語の中で、一部の事象名や人物名は関係する個人の人権を守るために変名を使用しています。それ以外のすべての部分は作者の原稿をそのまま掲載しました。

また、「雷竜の谷」に関連して、本誌初登場のエリオット・ラフキン教授による「イーオドンの谷の動植物に関する回想的考察」も同時掲載いたしました。私たちはこれを、時間に忘れ去られた谷に住む植物や動物の驚くべき生態を紹介する定期連載記事の第一弾と考えています。

締めくくりはお馴染みの本誌記者ジミー・マローンのレポートによる「ワイルド・ベイスン探検隊帰還す」です。この夏に消息を絶っていたワイルド・ベイスン探検隊は秘境ヒルカントリーから無事に帰還しました。その顛末をマローン記者がメンバーにインタビューします。

さらに、このアルティメイト・アドベンチャーズからあなたにすばらしい二大付録というプレゼントがあります。

まずひとつは、今号で紹介しているイーオドンの谷をその記述に基づいて美しいアートに仕上げたイーオドンの谷の全体図です。

そしてもうひとつは、読者のみなさんの間にも急増しているコンピューターマニアのためのディスク版〝雷竜の谷〟です。これはただ単にこの号の内容をディスクに収めたというようなものではありません。将来あなたが本誌でご覧になる驚異の世界を一足先に覗いて見ることができるのです。ディスクの使用法は操作解説書をご覧になってください。

この特別号はきっとみなさまを満足させることと確信いたしております。

最後に、どうかこのことは常に心にとめておいてください。この急速に狭くなりつつある現代世界の中にも、まだまだ冒険すべき世界が残されています。そして、私たちアルティメイト・アドベンチャーズは常にそんな世界に足を運んでいるのです。

編集部

読者からのレターズ

マックグレゴール氏の連載「戦場における応急ツールと戦略」の第6回（Volume59, Number7, 1990年7月号：編集者注）はすばらしかったです。マックグレゴリー氏は大変に多忙な方なのですね。ご自身の半生に基づいたテレビショーの技術指導をなさったり、アルティメイト・アドベンチャーズに寄稿なさったり、本当に大変だと思います。

しかし残念なことに、有名な氏の凶器嫌いは氏の完璧な連載記事の唯一の欠点と言わざるを得ません。私はここで銃と爆弾についてお話ししたいと思います。私自身は障害物や敵の体に穴を開けたり、敵を驚かせたり、何かを倒したり、敵の策略をくじけさせたりするには、爆薬ほど有用なものはないと信じています。マックグレゴール氏が推奨するスイスアーミーナイフではそんなことはできません。私なら、戦場における万能ツールとして何にでも使えて最強の道具、爆薬を選びます。

硝石（硝酸カリウム）と炭素と硫黄が戦場でいかに役立つかは、あまり知られていない事実です。適量の爆薬を強固な筒（補強した竹筒でもよい）に詰め、石や岩塩を放り込めば、それと同じ重さの金と同価値の即席の抑止力を得ることになります。また、ヒョウタンや壺に爆薬を詰めて、導火線（ガソリン、灯油、ロウ、タールなどを染み込ませた布の帯でよい）を付ければ、野蛮人や泥棒や独善的な異端者どもが襲ってきても怖いものなしの強力な爆弾の出来上がりです。

私は爆薬が大好きです。好きで好きでたまりません。どうか、爆薬特集を組んでください。

J.D.リッパー
カリフォルニア州ターザナ

兵器としての爆薬の製造や使用を無責任に奨励することは、アルティメイト・アドベンチャーズの信念に反します。読者のみなさんにお願いです。このリッパーさんやリッパーさんと同じようなことをしつこく話す人を見かけたら、最寄りの保健所に届け出てください。

編集部

マックグレゴール氏の〝応急ツール〟の連載が私の大好きな二酸化炭素消火器に触れずに終了してしまったことを、とても残念に思っています。

大きくて重い道具ですが、消火器を1本持っていれば何かと便利なんです。工場地帯でもまだハロンが高価なこともあって二酸化炭素式が多く残ってますし……。

非常に手軽な煙幕としても使えますが、何よりも熱くなった物の表面（建物や船舶の火災によって高温になった床や扉など）を冷却して人を安全に通行させる効果を忘れてはなりません。そして、振り回せば強力な武器としても使えます。

それから、マックグレゴール氏の、いつでもどんなときでも照明器具を持ち歩くことというアドバイスがありましたが、私も個人的な経験を通してそれに賛成します。ポケット懐中電灯でも、マッチブックでも、ライターでも、木の燃えさしでも、松明でも、何でもいいんです。それが未開のジャングルだろうが、街中だろうが、味方に囲まれていようが、毒蛇の巣の真っ只中だろうが、即座に明かりが点けられる用意が非常事態からあなた自身を救い出すことにつながるのです。

ジェームス・クラーク・ワイルドマン
ニューヨーク州ニューヨーク市

マックグレゴール氏の連載の反響は相当なものでした。私たちは引き続き氏に定期連載記事を書いてくださるようお願いしていくつもりです。実は、以前にも増して氏の協力が必要になっているのです。そのわけは次のおたよりをお読みになってください。

編集部

私の日頃からのよき協力者であり、貴誌の定期寄稿者であるケント・レーンは、先日の不慮の事故死のためかねてよりお約束しておりました「現代の未開世界」の連載記事をお届けすることができなくなりました。ここに慎んでお知らせいたします。

ご記憶のこととは思いますが、彼は現代はアメリカの大都市にたむろするストリートギャングという新部族を構成する〝未開〟人種の時代であるという説を持ち続けていました。そこで彼は人類学者として彼らに接近し、いまだに知られていない彼らの文化をアフリカや南米の未開部族と初めて接触した19世紀の研究者たちと同じ視点で観察しようと試みたのです。

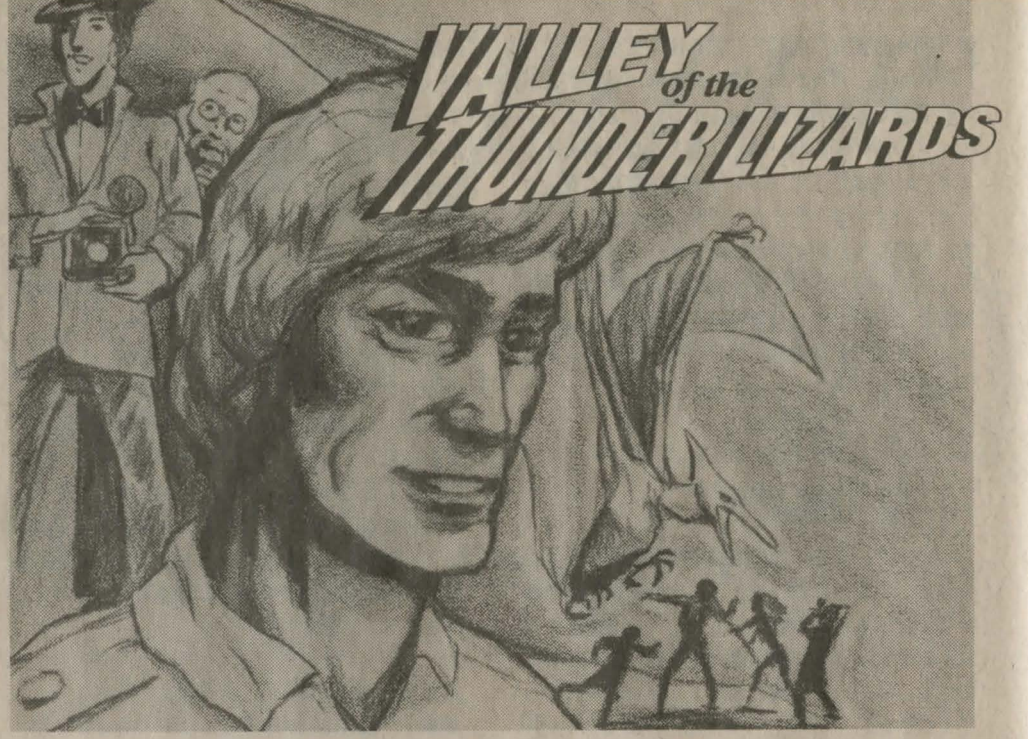
しかし、残念なことに彼は計画通りに行動することができませんでした。警察の報告によれば、彼が調査対象に選んだ〝部族〟の集会において、ケントは胸の悪くなるような気味の悪い肉の塊を差し出されたそうです。そこで彼はそれを反射的に拒絶したのだそうです。20世紀のアメリカ社会の感覚で、彼はそれをディナーパーティーの前菜ぐらいにしか思っていなかったのです。ところが、それこそがケントが求めていた彼らの儀式の一部だったのです。彼は肉を拒絶したことで〝酋長〟を激怒させ、自分の命を縮めることになりました。翌日、彼の頭部が発見されました。残りの胴体は見つかっていません。この件の部族が次の客に差し出しているのではないかという心ない噂も聞こえています。

ここで読者の皆さんに忠告をさせてください。この20世紀の時代でも、自分たちのものに酷似した文化のある習慣が、あなたのある習慣と同一の行動に見えても、そしてその人がすぐ近所に住んでいたとしても、決して油断せず、差し出されたものを断るときは、それにどんな意味があるのかをよく理解し、それを断るとどのような見返りを受けるのかを迅速かつ的確に見極めることが大切だということです。

アニタ・バン・スローン
テキサス州ヒューストン市

ケント・レーンは最高の男でした。寂しい限りです。

編集部



雷竜の谷

第一章：奇妙な出発

アバタール

咆哮が森の静寂をつんざいた。……それは粉砕機の爪に握り潰される金属が発するような甲高い叫び声だ。驚いた鳥が一斉に飛び上がり、私は目を覚ました。

だが、この森は何だ。ねじ曲がった椰子のような巨大な木々が密生し、太陽の光を閉め出している。そして、森の底にようやくたどり着いたわずかな光をむさぼるように葉を広げた巨大なシダ類。飛び去る鳥も不格好だ。翼はずんぐりと短く、尾は異様に太く長い。歯の生えたクチバシ、爬虫類のような冷たい目。

それよりも、なぜ私はここにいるのだろうか。こんな奇妙な土地へ自ら出かけて来た記憶はまったくない。

私は即座に体を起こし、自分の置かれた状況を検討した。

私はなぜか、この場に合った服装をしていた。丈夫な乗馬ズボン、ごついサファリシャツ、それに、苛酷なフィールドワークにも耐えられそうなロングブーツ。ベルトには昔から愛用し頼りにしている大型のボウイナイフが鞘に入って下がっていた。そして私は……私は……。

体が凍りついた。私は自分が誰なのかすらわからなくなっていたのだ。私の名前も、ここへ来た理由も、完全に抜け落ちている。私の記憶は深い真空の空洞に吸い込まれてしまったようだ。

またあの咆哮が遠くから響いてきた。私は我に返り、声のする方向へ歩き始めた。何かが起こっているその場所へ行けば、私の中から追い出された記憶をたぐる鍵が見つかるかもしれない。

夢かもしれないと、私は頬をつねった。期待に反して痛みを感じた。周囲に意識を集中したが、私が知覚する物事はあまりにも詳細で、夢とは思えないほどだ。頭上をおおっている緑の屋根を貫いて数百本の銀色の光線が降り注いでいる。のしかかるような重い湿気を含んだ空気、ジャングルの生命感に溢れた種々雑多な匂い。これが夢だとしたら、危険なほどに現実的だ。

歩いていくうちにジャングルの中の小さな空き地に出た。頭の上には、木の枝やシダの葉が長いひさしを作って太陽を遮っていたが、一カ所だけ、目映いばかりの黄金の陽光が空き地の中央を照らしていた。私はさらに歩を進め、身の安全を確保しながら、あの恐ろしい叫び声の原因を見極めようと体の位置を動かした。

空き地の縁まで来たとき、私は動く物を確認した。スピアを構えて空き地の上を優雅に動く柔らかいシルエット。それが光の筋をかすめたとき、私は照らし出された姿を見た。

若い女性だ。

彼女はこの土地の人間だ。私のようなよそ者ではない。彼女の小さな衣装は、斑点のある豹の毛皮の切れ端のようだ。手にしているスピアの穂先は石器だ。その淡褐色の肌はアメリカ原住民を思わせる。そして彼女の顔だちは……。

彼女は決してモデルクラブが理想とするような整った生意気そうな顔だちではないが、なかなかどうして、美しい。茶色の目は鋭く、知性と集中力にみなぎっている。わずかに開いた唇には何の感情も表われていないが、男心を掻き乱す愛らしい微笑みを浮かべるようにできている。振り乱された豊かな黒髪は自然のままで、手入れを拒んでいるように見えるが、千人の美容師が束になっても、このスタイルを真似ることはできないだろう。彼女の動きにはバランスと自信が感じられる。まるで人間の女に生まれ変わったジャングルの猫族だ。

私は音を立ててしまったようだ。彼女は警戒してこちらを振り向いた。光の筋が彼女に当たった。彼女は私に顔を向けている。私には気付いていないようだが、視線はこちらにじっと固定したままだ。豹に睨まれた小動物のように、私の体は硬直した。

またあの金属的な叫び声が響いた。ちょうど空き地の向こう側から聞こえてくる。彼女は咄嗟に振り返った。そして彼女と私は同時にその声の主を目撃したのだ。

地響きを立てて暗がりから躍り出たそのシルエットは、二階建ての家ほどもあったろうか。巨大な爬虫類だ。太い二本の足で歩いてくる。体全体が影におおわれていたが、二列に並んだ鋸のような牙だけが、木洩れ陽を反射して輝いていた。

それは、血に飢えた急行列車のように彼女に突進していく。考える間もなく、私も彼女に向かって突進した。だが、何のために……？　歩く人喰いマシンから彼女を救って逃げるためか？　それとも、あの爬虫類を倒して粉々に切り刻むためか、この貧弱なナイフ一本で……？　そのときは何もわからなかった。何も考えなかった。行動があっただけだ。

ところがその瞬間、私が立っている場所を残して周囲の光が消えた。音も、湿気も……まるで誰かが電気を消して一瞬にしてセットを壊してしまったようだ。私は立ち止まった。周囲を警戒し、すでにアドレナリンが全身に回っていたが、なんとか落ち着こうと試みた。

「この土地は実在する」

背後から声がした。ナイフの柄を摑み振り返ったが、声の主には敵意は感じられなかった。

「女は実在する」

それは気品ある銀髪の中年の男性だった。顎髭と口髭は清潔に手入れされ、目に知性を湛えていた。そしてカラフルなローブをまとい、頭には素朴なデザインの黄金の冠を戴いていた。

「あの生き物も実在する。しかし、さほど危険な種類ではない」

知っている人だ……。彼の記憶が私の心の表面に浮かび上がってきた。私は彼を信用することにした。返事をしようと思ったが、声が出なかった。

「友よ、破壊されたムーンストーンについて調べてほしい。お前のムーンストーンでは、その場所へ行くことはできないが、そこに行けば必ずある」

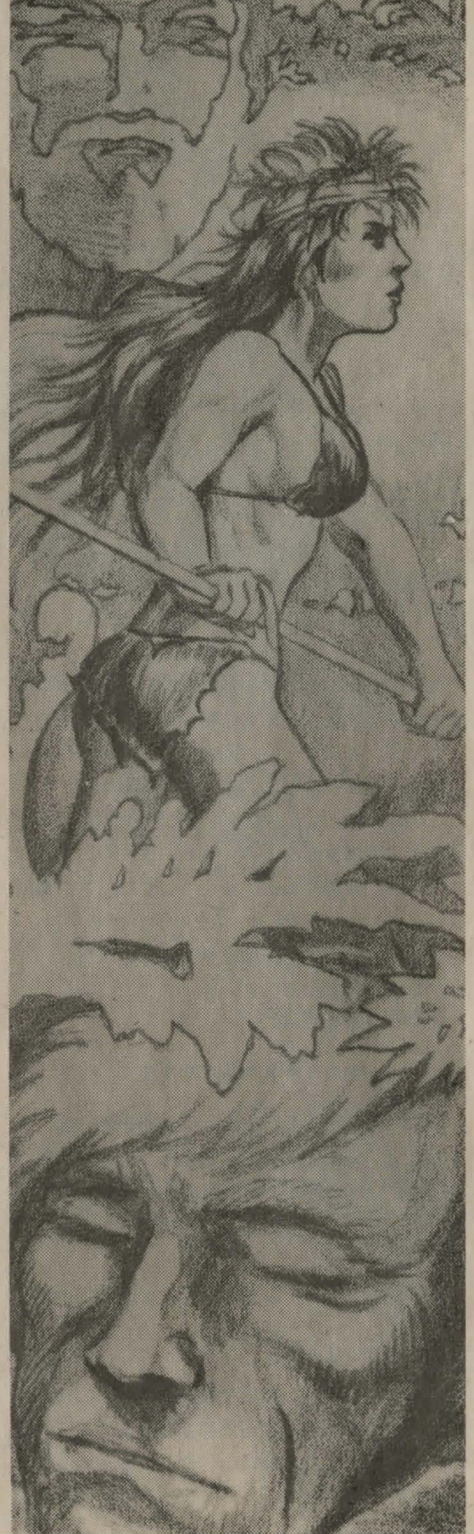
そして光が消えた。私は目を開けた。身を起こしたのは自分の家の自分のベッドの上だった。私の名前も記憶もすべて戻っていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

すべては夢だった。しかし、記憶を思い起こしてみると、それは現実でもあった。ここ数日間、私は細かいところまで寸分違わない同じ夢を続けて見ていたのだ。ただし、今回に限って〝彼〟が登場した。

夢の終わりで私に話しかけてきたのは、ロード・ブリティッシュだった。

ロード・ブリティッシュ……今、彼について説明する余裕はない。崇高な知恵と精神力の持ち主で、神秘の世界の最高実力者であるとだけ言っておこう。彼は本当に運のいいごく一握りの現代人だけが訪れることのできる、すばらしい世界を治



めている。私は幾度となく彼に協力を求められてきた。そしてその都度、彼に力を貸してきている。

今回もひと肌脱ぐことになるのだろう。彼の要求もはっきりしている。「破壊されたムーンストーンについて調べてほしい」と。私もムーンストーンは持っていた。ロード・ブリティッシュが治める国から持ち帰ったものだ。メノウのような磨き込まれた黒い丸い石だが、それには驚くべき力が秘められている。だが、これが破壊されるとはどういうことなのか、まるで見当がつかなかった……少なくともその時点では。

誰に聞けばわかるのだろう。私には、長年かけて知り合った博学な友人が大勢いたが、白羽の矢は迷わずラフキン教授に立った。

エリオット・ラフキンは膨大な技能と好奇心を持つ反面、まったく時間を持たない人間だ。彼は長年、科学や研究と名のつくありとあらゆる物事をできるかぎりたくさん学んできた。だから、私が知りたいことを知らなかったとしても、それを知っている人を知っているはずだ。

私は急いで服を着た。皮肉にも私はそれとわかりつつ、夢で着ていたのと同じ服を選んでいた。愛用のボウイナイフを鞘に滑り込ませた。さてこれから、私は夢の源を辿ることになる。自分の夢の中に入っていくような気分だ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

私がラフキン教授に初めて会ったとき、彼は学校の教師をしていた。現在はこの町の自然史博物館の館長を務めている。それは彼にとってまさに適任の職業と言えるが、彼の採用は残念ながらその科学的知識の深さが買われてのことではなかった。

ラフキンは人間関係において特殊な才能を発揮するのだ。彼の科学に対する熱狂的なまでの好奇心には伝染性があり、誰かれ構わずそこへ無理やり引きずり込んでしまう。トルコ沖で起きた船の座礁の話であるとか、ギリシャとアステカの神話の回帰性であるとか、月の石の分光器分析の話であるとかという、一般の人間がおよそ関心を示さない話題を持ち出して、30分以上も事業家に講義を行ない、揚げ句に博物館の寄付金として多額の小切手をせしめ取って、さっさと立ち去るのである。決して相手を騙しているわけではない。最初から金を巻き上げようなどとは微塵も思っていないのだ。しかし、結果はいつもこうなってしまう。

博物館は、彼のために建物の裏に研究所を設立した。展示物の整理やディスプレイはラフキンの助手たちが行なっていた。館の役員たちは重要人物との会食や大学での講演などにラフキンを連れ出したが、それ以外の時間は自由だった。ほとんどの場合、彼は研究室をうろうろしていた。

博物館に到着した私は、正面玄関を避けてラフキン専用の何も書かれていないドアに向かった。ドアの脇の呼び鈴のボタンを押すと、それに応えるように自動ロックを外すピーッという音が聞こえた。私は中に入った。

さて、みなさんもお察しのことと思うが、ラフキンの研究室は人と車でごったがえす繁華街そのものの様子を呈している。部屋の中、机の上、何がどこにあるかを知るすべはない。私はよくこの部屋に入り、発掘された古代遺跡の模型や、木枠に梱包されたままの実験道具や、本と学術論文の山や、スパークを発する意味不明の装置や、ガラス瓶の中に保存されている臓器（古い友人を訪ねている間中この保存瓶の中身に見つめられているかと思うと、いつも背筋が寒くなる）を目にする。今日もその様子はいつもとまったく変わらない。

だがラフキンは不在だった。そのかわりに、部屋の片隅のクッションの利いた椅子に骨ばった若者がひとり座っていた。ツーピースの背広を着込んでいるが、ベルトの位置が妙に高く、上着の襟幅がやけに広い。1930年代の懐古趣味的芝居から抜け出たようなスタイルだ。

彼は私が部屋に入るなり、有り余るエネルギーをバネに飛び上がった。「どうも」と言って彼は手を差し出した。私はその手をとって握手した。「ジミー・マローンです。ラフキン教授に会いに来られたんでしょ」

「ああ、そうだけど……」

「すぐに戻ってきますよ。ミイラに〝魅入ら〟れちゃってんですよ。アーッハッハッ。笑い過ぎて死にそうだ。ところで、あんた誰？」

「私は……」

彼は急に何かを思い出したように、私の顔を見つめて言った。「あっ、知ってますよ。あなたに関する資料は山ほどあるんですから。何日間も急に姿を消したかと思うと、いつも真黒に日焼けしてフラッと戻ってくる。近所の人は、みんなあなたのことを不気味に思ってるって、ご存知でした？何か一言お願いします」

彼は上着のポケットを探ってボロボロのメモ帳を取り出した。

私はしばらく目を閉じ、深呼吸をした。「なーんだ、取材か。ラフキン教授に会いに来て、記者に捕まるとはな」

彼はニヤリと笑った。「今日みたいなネタのない日は、ラフキン教授に面白い話を聞きに来るんです。あ、そうだ。じゃあ正式の恰好をしますよ」

彼は近くの机から帽子を取り、その内側から小さなカードを取り出して帽子のリボンに刺し、かぶって見せた。カードには大きく〝PRESS〟（報道関係者）と書かれている。

「ちょっと時代遅れじゃないか」

彼はさらにニヤニヤ笑いを浮かべた。「世の中には伝統を重んじない人もいらっしゃる」

そのとき、乾いた冷笑的な別の声が飛び込んできた。

「ジミー、私の友人は伝統を大切にする人だ。ただし、キミのその歪曲したステレオタイプの偏重癖には同調しないだろうな」

振り返ると、展示室に通じるドアのところに、ラフキン教授が現われた。彼の言葉に私は思わず頬を緩めた。彼のワイヤーフレーム式の眼鏡と三角形の頬髭は私にもひとつのステレオタイプを呼び起こさせた。本や映画でよく見かけるビクトリア朝時代のマッド・サイエンティストだ。だが幸い教授はマローンと違って現代的な服装を好んでいる。

ラフキンは私に顔を向けた。「ところで、何の用だね？」

私は彼に謎めいた笑いを投げかけた。「なぞなぞですよ。6メートルほどの身長で、ジャングルを歩き、若い女を食べる爬虫類は？」

「トンチかね、真面目かね？」

「真面目です」

彼はしばらく考え込んでしまった。

「重量のある感じかね、それとも、大きさの割りに細い感じかね？」

「重量感があります」

彼は眉間にしわを寄せた。「キミの話に適合する

生物はハリウッドの外にはおらんな。条件から女性を取り除けば、恐らくそれはティラノサウルス・レックス、白亜期の肉食恐竜だ。低俗な映画では、恐竜が暴れ回って原始人を捕まえるなんてシーンもある。その中に女性も含まれることもあるだろうが、実際には、6500万年ほど待たなければ恐竜は人間を捕まえることができんのだ」ラフキンは諭すような目で私を見た。「ご承知のこととは思うが」

「ちょっと、折り入って話があるんだがな……」

ラフキンはマローンに目を向けた。マローンは目をぐるりと回して天井を睨んだ。「すまんが」ラフキンは言った。「ちょっと友だちと二人だけにしてくれんかね。ほんの2～3分の間、席を外して私のミイラのコレクションでも見学してきてくれたら、後でいい話をしてあげよう。ある種のウイルスがいかにしてミイラの包帯の中で数千年にわたって休眠し、それが棺を開けた途端に活動を再開して、あの恐ろしい〝ミイラの呪い〟伝説に貢献しているかについてだ」

マローンは私に冷たい視線を投げつけた。「どうしてもって言うんなら」

「どうしてもだ」ラフキンはやさしく答えた。

マローンが去ると、私はラフキンにすべてを話した。夢のこと、女のこと、恐竜のこと、ロード・ブリティッシュのこと、ムーンストーンのこと。ただし、ロード・ブリティッシュについては、すべての真実を話さなかった。遥かなるブリティッシュの王国へ行くあの驚異の手段だけは伏せておきたかったのだ。だが、それ以外のことは、微に入り細に入り説明した。そして話の終わりに、私は彼にムーンストーンを見せた。

ラフキンは私の話にじっと耳を傾けてくれた。その表情は瞑想的にも見えた。彼は私の手からムーンストーンを受け取ると、その光沢のある表面を調べ、手の平で重さを計ったりした。

しばらくして、彼は口を開いた。「正直言って、キミは頭を強く打ったんじゃないかと心配していたんだが、このムーンストーンとやらのことで、思いがけない偶然があるんだ。今、見せてやろう」そう言って私の手にムーンストーンを返すと、彼は研究室に並ぶ棚の中のひとつに向かった。

ボール紙の箱を抱えて教授は戻ってきた。箱の中にはくしゃくしゃになった新聞紙が詰め込まれている。新聞の文字はドイツ語だった。ラフキンは箱に手を突っ込み、かき回した。「これが送られてきたんだよ」彼は手を止めずに言った。「スペクターというドイツの人類学者のもとで最近まで働いていた私の教え子からなんだが」

彼は箱から黒い石を取り出し、私に差し出した。それはいろいろな意味で私のムーンストーンに似ていた。大きさも重さも同じだ。しかし、見た目はまるで違う。

私の石は磨かれて表面がツルツルしているのに対して、彼の石はひび割れゴツゴツしている。かつては私のと同じだったものが、あるとき大変な高温にさらされたような、そんな感じだ。私の石は磨かれた黒メノウに似ている。かたや、彼の石は黒焦げの黒曜石だ。何カ所かの平らな部分には光沢があるが、その他の部分には艶がない。これは単に磨かれていないというのではなく、何らかの理由で変質したのではないかと、私には思えた。

ラフキンは言った。「私の教え子によれば、スペクターは中央アメリカの発掘現場でこれをいくつか拾ったそうだ。ある晩、別の助手とこの石の調査を行なったのだが、次の朝、私の教え子が出勤したときには、二人とも消えていたそうだ。部屋の家具もろともきれいにな。まさにミステリーだよ。私の教え子も石をひとつ持っていたので、謎を解く手掛かりが見つからないものかと、私のもとへ送ってよこしたというわけだ。だが、忙しくてこいつの調査ができなかったんだ……今まではな」

「ぜひ、私からもお願いします。何かが解決されない限り、私はずっとあの夢を見続けるような気がしてならないんです。私の夢は私にムーンストーンのことを伝えた。さらにムーンストーンは私を先生のところへ導いた……」

彼は微笑んだ。「はたして、その信念を実証することができるかどうか。ではちょっと、石をいじくり回してみるかね。キミは自由にしてなさい」

ラフキン教授の「自由にしてなさい」とは、「調べ物をする間、私はキミの存在を無視するよ」という意味なのだ。そこで私は自分のムーンストーンをポケットにしまい、教授のお気に入りの安楽椅子に深々と腰を下ろした。

……数分後、ジミー・マローンが戻ってきた。

「じゃあ、あなたの失踪の話を聞かせてもらいましょうか。どういうワケなんです？　あなた、CIAですか？　アメリカが援護しているどっかの国の反政府組織の人とか」

「なあ、ジミー。キミは何でも好きなように書いて印刷すればいい。あとは法廷で会おう。そうすれば、弁護士同士でうまく片付けてくれる。そして私は眠れるってわけだ」

餌を見つけて狂喜乱舞するサメのように、ジミーの目が光った。「ほう、こいつは面白い。あなた、ボクのジャーナリストの血を湧き上がらせてくれましたね。では……」

ラフキンがジミーの言葉を遮った。「こりゃいったい……」

私は立ち上がって教授のほうを見た。マローンは持ち前の〝ジャーナリストの血〟の衝動に動かされて、咄嗟に上着からポケットカメラを取り出し、フイルムが巻かれていることを確認した。

ラフキンは電線や電極が取り付けられたムーンストーンを置いたテーブルからあとずさった。すべてが眩しい透明なエネルギーの光に包まれていた。

「どうしたんです？」私は尋ねた。

ラフキンは頭を振り、当惑してテーブルの上を見つめた。「私は素材の温度と電導率を調べていたのだが、初回の測定値はでたらめだったんだよ。石にある量の電気エネルギーを注入すると、それ以上のエネルギーを放出する……、いや、そう計器には表われた。そのとき、あの光が発生したんだよ」

彼が話している間も、テーブルの上の光は風船が膨らむように膨張し、実験器具を包み込んでいった。

私が止める間もなく、ラフキンはためらいがちに光に手を伸ばして、それに触れた。音がした。弾けるような、焦げるような。世界最大の水滴が世界最大のフライパンの上で跳ね回ったような、そんな音だった。ラフキンは跳ね飛ばされ、数メートル後方の床に叩きつけられた。

私はすぐに彼の脇に駆けつけた。そして、彼と、まだ膨張を続ける光との間に自分の体を置いた。彼の目は閉じられ、息は浅かった。「先生」私は彼の体を揺さぶった。光の位置を確かめようと肩越しに後ろを振り返ると、それはまだ3メートルほど離れてはいたが、輝きは衰えていなかった。

突然、部屋の明かりが消えた。同時に光の球も消えてしまった。闇の中で目の焦点が合っていくにつれ、マローンが壁に取り付けられた金属の箱の脇に立っていることに気が付いた。ブレーカーだ。彼は主電源を切ったのだ。これによって、それまで振れていたこの男に対する評価の針は、数目盛上を指すようになった。博物館の役員たちが展示室に通じるドアの向こうでブーブーわめいているのが聞こえた。

「よくやった、マローン」私は素早く次の行動に移った。「急いで救急箱を取ってくれ。本棚のどこかにあるはずだ」私はラフキンの手首を握り脈を診た。どれだけ強いダメージを受けたかを確かめようとしたのだ。

マローンは本棚に走り、その価値も考えず棚の上の物を乱暴に掻き分けた。これを見たらラフキンは激怒するに違いない。事実、自分の所有物に危害が加えられている音を聞きつけて、ラフキンはパッと目を開いた。

「触るんじゃない！　それはとてもデリケートな装置なんだ！」ラフキンがこんな大声を出したのを聞いたことがなかった。しかも、あれだけ強いショックを受けた直後にこんなに元気になるとは思ってもみなかった。初老の科学者はがばと身を起こし、私を脇へ押し退けて雑誌記者を怒鳴りつけようと立ち上がった。「私の研究に興味があるからと言って、私の測定器具を勝手に触っていいとは誰も言ってはおらんぞ。キミは……」

私は割って入った。「私が救急箱を探すように言ったんです。先生が気を失っていたんです。そこでマローンが先生の実験器具の電源を切ってくれたんです」

ラフキンの顔は困惑の表情を浮かべた。「なに、それならなぜ、まだアレが光っているのかね」

私はそちらに目をやった。彼の言う通りだった。石の周りに再び光が現われた。ぼんやりとした光が次第に強さを増していく。

マローンが本棚から離れた。「そんなバカな。電源を切ったんだぜ」

「マローン、先生」私は言った。「ここから出るんだ。悪い予感がする……」

マローンは馬鹿ではない。私が言い終わるよりも早く逃げ出した。だが、彼がドアまであと数歩というときに、床が揺れだした。細かく波打つような振動に、マローンもラフキンも床に投げ出された。私も辛うじて立っていられる程度だった。

テーブルの上の光は強烈に輝き始めた。今回は大きく膨らまなかったが、その代わりに別のものが現われた……。私には親しみのある物体だ。しかし、どこか異質だ。

それは部屋の中央の空間に現われた。普通のドアの半分ほどの大きさの薄気味の悪い黒い長方形だ。何に支えられることなく、自分で浮かんでいる。ラフキンは目を皿のように見開いた。最も安全な場所にいたマローンは、再びカメラのシャッターを切った。

「これはいったい……」ラフキンは大きく息をついた。

「ムーンゲートです」私はやや疑いを残して答えた。「つまり……穴です。時間と空間の穴です。ロード・ブリティッシュの話をしましたよね。彼の国へ行くときに、これを通って行くんですが……、こんなのは初めてだ。いつもは青いんですよ。吸い込まれそうな青なんです……」

こんな〝動き〟をするムーンゲートも初めてだ。現われた場所に止まり、また消えるというのではなく、これはどんどん大きくなっていく。全方向に膨張しているのだ。私たちが何か手を打つ前に、私たちを飲み込もうと成長していく。

ラフキンは反対方向に逃げようとしたが、黒い影が彼を捕まえた。マローンはドアに手をかけたが、影が彼の体を包み込んでしまった。私は外へ通じるドアに向かって跳躍したが、宙を飛んでいる間に漆黒に飲まれてしまった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

吐き気をもよおすような強烈な落下感覚に襲われた。パラシュートの代わりに目隠しをして飛行機のドアから転げ落ちたような感じだ。私は身をよじり、四方八方に手足を突き出してもがいてみたが、虚しく宙を掻くだけだった。しばらくの間、私はあの異形のムーンゲートの中の音のない暗闇に閉じ込められていた。そしてようやく着地した。

私は肩から研究室の床に落ちた。突然の衝撃で私の目はくらんだ。ラフキンの喘ぐ声が聞こえた。そして、マローンの「冗談じゃない、今度は何だってんだ」という大声。

それに続いて、他の物音も聞こえてきた。遠くで鳥の鳴く声、そよ風に揺らぐ木々の音、虫の声、彼方で聞こえる狼の遠吠えのような声……。

視力が戻り、自分がどこにいるのかを、やっと知ることができるようになった。

私は研究室の床に倒れている。場所は想像した通りの地点だ。私は外に面した壁から数十センチの地点に落ちたはずなのだが、研究室の床は柔らかいジャングルの地面につながっている。壁がない。最初から存在していなかったかのように、跡形もなくなっている。

周囲を見回すと、部屋のすべての面が同じ状況になっていた。すべての壁と天井が消え、ジャングルが広がっている。頭上には緑の木々がおおいかぶさっている。エアコンで冷やされていたラフキンの研究室の空気の中に、蒸し暑い空気がなだれ込んできた。

それ以外の点では、研究室は無傷だった。テーブル類も本棚も椅子も簡易ベッドもそのままの場所にある。ひび割れたムーンストーンもラフキンの測定器具につながれたままだ。しかし、もう冷たく黒くなっている。黒いムーンゲートはと言えば、もう影も形もない。

ラフキンは驚いた表情であたりを見回し、私に目を向けた。「ふむ」

「は？」

「まさか……、キミが夢で見た場所じゃなかろうな？」

私はうなずいた。「とてもよく似ています。木々もシダ類も、すべて同じです」

マローンががばと立ち上がり、反射的にカメラのシャッターを押しまくった。彼の様子から、電気ショックを受けたのはラフキンではなくマローンだったかのような印象を受ける。彼の口は正常だったが、どうにも言葉が出てこないのだ。

ラフキンは自分が置かれた状況を慎重に観察しながら言った。「混乱していては何も始まらない。これが妄想だという可能性もあるが、完全な現実だと想定して対処すべきだと思う。もし、これが完全に現実だとして、キミが夢で見た物象と同一のものがここにあるなら、恐らく……その他のものも存在する」

「論理的ですね」私は彼の分析を嬉しく思い答えた。「もし実際にいたとしても……つまり、キミの夢に出てきた肉食恐竜のようなものがだ。この研究室にはライフルがある。実はついこの前、個人コレクションの一部を博物館が譲り受けたものなんだが、分類に困っていたところなんだ。出しておいたほうがよさそうだな」彼は本棚のひとつに歩きかけたが、途中で気が変わり、私たちに向き直った。「だが必ずしもそれは……」

遠くから響いてきた叫び声に彼の言葉は遮られた。恐怖の悲鳴ではない。怒りの怒号でもない。人間の声ですらない。動物の声だ。私が夢で聞いた咆哮よりも、ずっと鋭く突き刺すような響きだ。むしろ猛禽類の鳴き声に近い。

ラフキンと私は素早く首を回し、声のする方向を見つめた。当惑し通しだったマローンも、そちらに目を向けた。そのとき、もう一度声がした。またしても甲高く、短く、攻撃的な声だ。しかし、今度はまさしく人間の声だった。若い女が発するような声だ。

無意識のうちに、私は声のする方向に走っていた。ラフキンの制止も耳にはいらなかった。「待ちたまえ、私がなんとか……何ということだ、まったく」ラフキンが私を追って走ってくるのがわかった。さらにその後を追ってジミー・マローンが慌てて付いてくるのが聞こえた。

地面は柔らかく深い下生えにおおわれていたが、私は意外にも全速力でジャングルを走り抜けることができた。また声がした。動物の鳴き声に人間の叫び。それは戦う敵同士の雄叫びだと、私は確信した。

私は間違っていなかった。うっとうしいジャングルの緑の屋根を過ぎて、太陽の光の中に出た。目がくらみ、立ち止まって視力の回復を待った。そして、ついに私は、声の主を目にしたのだ。

そこはジャングルの中に口を開けた広い空き地だった。岩盤が露出しているため、植物は根を張ることができないのだ。その中央の空中に、何かが、恐竜時代の生物だとおぼろげに記憶している何かが浮かんでいた。教科書の挿絵にあった翼竜プテロダクティルだ。頭に骨の項飾とクチバシに長い滑空用の翼のある空を飛ぶ爬虫類……だが、コイツはやけに大きい。

翼長を即座に目測することはできなかった。空中の一点に止まろうと激しく羽ばたいていたため、正確に計ることは不可能だ。翼の端から端までの

長さは、ざっと見積もっても30メートル以上はあったように思う。体色は茶色がかった緑。ある種の象に似ている。近くでよく見なければ、灰色だと思い込んでしまいそうな色だ。

それがなぜあの一点に止まっているのだろうか。再び前進を始めたとき、ラフキンとマローンが現われて、それまで私が立っていた場所に釘付けになった。私はようやくその生き物の攻撃目標を見ることができた。

女だ。しかも普通の女ではない。動物の毛皮を身につけた、私の夢に出てきたあの女だ。〝夢の中の女〟……、この状況に及んでなお、その言葉が私の心の中に響いてきた。私の思考は淡い矛盾の色に染まった。

彼女はスピアの名手であるかのようにスピアを持っていた。そして実際、彼女は名手だった。彼女は叫び声をあげた。しかしそれは悲鳴ではない。戦いの叫び、ジャングルの〝気合い〟だ。彼女は両手で握ったスピアで翼竜の腹に強烈な一撃を加えた。翼竜は腹を刺され、たまらなく高度を上げた。

そのとき、彼女は背後から勢いよく駆けてくる私に気付いて振り返った。そして、素早く体の向きを変え、新たな敵に対して身構えた。

私は彼女の顔を見た。それは、私の夢に取りついて離れないあの顔だった。彼女も私の顔を見た。すると彼女の攻撃的な表情が困惑の表情に変わった。そして、何かを認識したかのような光が彼女の目をよぎった。

彼女の一瞬の注意力の間隙をついて翼竜が舞い降りてきた。それは彼女を地面に押し倒し、鉤爪で彼女に掴みかかった。その拍子に彼女はスピアを放してしまった。

そのとき私は、ほとんど翼竜に届く距離まで来ていた。速く走りすぎたため、足が止まらない。翼竜は私に襲いかかってきた。鋭いクチバシが、私の胸のど真ん中を狙っている。

反射的に……この反射的行動こそ私が修行の末に会得した能力であり、何回も私の命を救ってくれた力である……私は剣術の受け身技である腕で円を描く動作によってクチバシの針路をかわした。その剛毛におおわれた皮膚で私の腕は切り裂かれたが、それでも私は走り続け、巨大な胴体に首がつながっている部分に思いきり体当たりをかました。

大きな翼が振り上げられた。次の瞬間にはそれは強く打ち下ろされるはずだ。獲物を掴んで飛び去ろうというのだろう。体当たりから間髪を入れず、私はその首に腕を回して抱きついた。恐らく私の体重が加わることで、飛び上がることは阻止できるだろう。その間に、彼女が意識を取り戻して逃げてくれればよいのだが。

そいつが首を後ろに回し、何かに噛みつこうとしたとき、私の腕は危うく外れそうになった。それが狙った相手は……ジミー・マローンだった。彼はすっかりショックから立ち直っていた。攻撃を受けて、安全な距離で立ち止まったが、すぐに翼竜の周りを円を描くように走りだした。翼竜はジミーの動きを追うことができなかった。私はその機会に、前よりもしっかりと首に抱きつくことができた。ジミーはそいつの頭をかわして背後に回り込み、その皮が剝き出しの大きな背中に勢い

よく飛びついた。「さあ、39番ジミー・マローンが墨に出ました！」彼は大声で叫んだ。しかし、彼の元気は声だけだった。彼の目は大きく見開かれ、恐怖に怯えていた。

「放すなよ！」私は彼に向かって叫んだ。「こいつは飛び上がれない」

「わかった！」返事が返ってきた。だがジミーの声ではない。ラフキンだ。翼竜の腹の下から聞こえたようだが。私は自分の耳を疑い、翼竜の下を覗き込んだ。そこには、うつぶせの女性を抱きかかえて、それを巨大な鉤爪から引き放そうとしている教授の姿が見えた。しかし結局、彼女は鉤爪に取られてしまった。なんとも、こいつの首にしがみ付くよりも、もっと危いことをしてくれる。

翼竜はしばらく激しく体をよじったが、私たちの誰一人、振り落すことはできなかった。だが、それによって私は傷を負い、ジミーは空中に放り出されそうになった。ついにそれは翼を打ち下ろし、体を浮き上がらせた。

しかし、すぐにまた地面に落ちた。そのとき、翼竜の金切り声にも負けない教授の「うわっ！」という苦痛の叫びが聞こえた。再び翼が打ち下ろされた。今度は、3メートルばかり飛び上がり、続けて羽ばたくごとに、少しずつ高度を上げていった。

私は周囲を眺めることができなかった。ようやく目にすることができたのは、遠くまでうっそうと続くジャングルの姿だけだ。とうとう地面に押さえつけておくことはできなかった。いったい、どこまで連れて行かれるのだろうか。人間ほどもある大きな雛が大勢待ち受ける巣の中に落とされるという最悪の光景が頭をよぎる。巣に連れて行かれるのだけは御免だ。どことも知らない未知の土地に降りるほうが、よっぽどマシだ。

羽ばたくごとに、私は激しく揺さぶられ、ジミーは放り出されそうになったが、私は何としても背中によじ登り、片手を自由にしたかった。悪態をつきながら、満身の力を込めて、私はそいつの首の裏側へ、一度、二度、三度と足を蹴り上げた。試みは三度目にしてようやく成功した。

だが突然、私は頭に衝撃を感じ、気を失いかけた。翼竜が上空を見上げたときに骨飾りが振り下ろされ、私の頭蓋骨を直撃したのだ。私はその場で翼竜にしがみついた。頭の中の痛みは間もなく消えてくれた。

私は運を天に任せて片腕に力を入れ、もう片方の手を体の後ろに伸ばし、ボウイナイフの柄を探った。それはまだ鞘の中に収まっていた。私はナイフを抜いた。それと同時に大きな衝撃が加わった。危うくナイフを落としそうになったが、心臓も止まらんばかりの軽技で、なんとかナイフを握り直すことができた。

私は翼竜の首をめがけて死の一刀を浴びせようとナイフを振り上げた。しかし、冷静な思考が私の攻撃を制止した。一撃でこれを殺すことはできない。翼竜を墜落させてはいけないからだ。安全に着地させなければならないのだ。そこで私は、翼が胴体につながっているあたりに見当をつけて、前を向いたままナイフを後ろ手に振り下ろした。殺すためではなく、ダメージを与えるためにだ。

三度目の攻撃で手応えを感じた。ナイフを引くと、刃に血が付いていた。翼竜は悲鳴をあげた。それまで、この翼竜の声は大きいと単純に思っていた。しかし、首根っこに摑まって聞くその声は、私を吹き飛ばしかけ、体中のすべての骨を激しく振動させた。それでもこいつは飛び続けている。そして私は、繰り返し繰り返し、その翼や肩に切りつけた。

私は時折、翼竜の腹の下を確かめた。最初のうちは、目を見開き必死の形相で翼竜の右足にしがみつくラフキン教授と、その鉤爪に摑まれた気を失った女の体が見えていた。

しばらくすると、女の目が開いていた。彼女が身につけた毛皮をまさぐっているところが見えた。鋭い石のナイフを取り出すところが見えた。そして、翼竜の腹に一撃を加えるところが見えた。

その直後、彼女は命を失いかけた。翼竜は鉤爪を開き、トゲのある獲物を手放したのだ。ところが驚いたことに、あのラフキンが、落ちていく女がノーベル賞にでも見えたのか、彼女の手首を目にも止まらぬ早業で摑まえた。

その生死を分けた光景を、私は途中で見失ってしまった。翼竜が急に右に傾き、高度を落としたからだ。私は危うく振り落とされそうになった。これは意図した行動に見えたが、高度は次第に下がっていった。この降下は傷が原因のようだ。

もう一度ラフキンを見ると、彼は再び両手で翼竜の足を摑み、短い足で女の胴を挟んでいた。彼女はと言えば、目を細めて片手で彼に抱きつき、もう片方の手で翼竜の鉤爪を摑んでいた。実に滑稽なポーズだったが、前よりは幾分安定した形になっている。

翼竜はまたあの骨に響く声で叫んだ。だが、音量は低く、何かを恐れるような弱々しさが感じとれた。着陸地点は決めたのだろうか。私には果てしなく広がるジャングルのどこにも、それらしい場所は見つけられなかった。降りる場所を心得ているのかいないのか、それは着地の態勢に入った。

我々はジャングルの緑の屋根を引き裂くように飛び、木の枝や葉状体に鞭打たれた。その直後、大きな衝撃を感じた。細い枝にぶつかったようだ。

すると前方にジャングルの切れ間が見えた。さっきと似たような岩盤が露出した空き地だ。突然、広い空間に出た翼竜は、慌てて速度を落とそうと前方に向かって羽ばたいた。

速度が落ちた……。と同時に私の後方で悲鳴が聞こえた。ジミー・マローンだ。これまで振り落とされまいと必死にしがみついていた彼だったが、翼竜が急に速度を弱めたことで、ついにエラーを犯してしまった。青い塊が、私の頭越しに前の方へ飛んでいき、私の視界から消えてしまった。

そして、不気味な音とともに、翼竜の翼のどこか……恐らく私が傷をつけたあたり……が裂けたようだった。

翼竜は断末魔の叫び声をあげた。前方への慣性を殺すことができず、それは頭から椰子のような木に突っ込んだ。

その衝撃で、私もついに放り出され、別の木の幹に体をぶつけ、地面に落ちた。そのときは30メートルも飛ばされたかと感じたが、実際には3メートルも飛んではいないはずだ。

それだけではない。背中から落下した私は息が止まってしまった。空気を吸おうとあえぎながら、痛みを殺して立ち上がろうと無駄な努力をするのが精一杯だった。

私が倒れた地点から、翼竜の死骸が数十メートルにわたってジャングルの地面をおおっているのが見えた。まだ少し痙攣が残っていたが、大きく動くことはもうないだろう、と思ったら、翼の私に一番近い部分が突然動きだし、不自然にめくれ上がった。

中から、褐色の肌の原住民女性が這って出てきた。彼女に続いて現われたのは、痛々しげに四つん這いになったラフキンだ。二人とも地獄から這い出てきたような姿をしていたが、とにかく生きていた。二人は死んだ翼竜を振り返った。そして私とジミーを探して、あたりを見回した。

私は、ジミーがまだ動けるのを見て驚いた。それどころか彼は走っている。彼は片足を引きずりながらも木々の間から飛び出してきた。服は鉤裂きだらけで、顔にも擦り傷を負い、翼竜の血を全身に浴びていたが、殺されそうな勢いで走り出てきたのだ。彼は男たちに追いかけられていた。豹の毛皮の衣服を身につけた、いかにもジャングルを知りつくした風な褐色の肌の男たちだ。

女は私に近付き、恐る恐る私に手を差し伸べながらジミーの方を振り向いた。ひとつの短い単語が彼女の口から発せられた。すると原住民の男たちは即座に彼女の命令に従い、その場で立ち止まった。ラフキン教授のところまで駆けてきたジミーはちらりと後ろを振り返り、もう男たちが追って来ないのを確認して立ち止まり、大きく息をついた。

私の体に次第に呼吸が戻ってきた。私はやっとの思いで女の手を掴み、立ち上がることができた。空き地を取り巻くジャングルの壁から最後の一人が現われたのは、そのときだった。

彼は長身の白人で髪はブロンド、歳は若い。どことなく高貴でしなやかな鍛えられた体格をしている。他の連中とは違った衣服をまとっている。彼が着ているのは毛皮ではなくなめし皮だ。足も彼だけは素足に近い。

その顔は私には馴染みの顔だった。遥か遠く、ロード・ブリティッシュが治めるブリタニアの原野を共に冒険した、見慣れた顔だ。

まだ息が不安定だったが、私は声を絞って彼の名前を呼んだ。「シャミノだろ？」

彼は驚いたような顔で私を見つめた。彼の目に反応があった。しかし、それはすぐに消えてしまった。彼は首を横に振り、否定した。だが、彼の顔には、自分で否定していることに疑問を持っているような、そんな表情が見てとれた。彼は自分の手で自分を差し示して言った。

「シャムルー。シャムルー」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

キャンプの焚火は、我々を取り囲む夜の闇とは対照的に明るく、心が勇気付けられた。

私は火を囲んでジミーの脇に座った。彼はラフキンのシャツを裂いて作った包帯で体中を飾りたてられていた。ラフキンは、私の旧友と同じ顔をしたシャムルーと予期せぬ飛行に誘ってくれた女性アイエラの二人のそばに座り、片言での会話に熱中していた。そして私たちの周りには、恐らく20人ばかりのジャングルの部族の男たちが囲み、アイエラが発する命令に従って行動していた。

焚火にあぶられて黒焦げになった肉をひと塊、むさぼるように食べたあと、私の気分は少し落ち着いた。言っておくが、これは私たちが倒したあの爬虫類、スーパープテラノドン……そうラフキンが命名した……の肉ではない。原住民は食べられない肉として捨ててしまうのだ。その代わり彼らは、草食動物をたくさん捕ってきた。蹄のない獣以外は小型の馬と鹿の中間のような動物が多かった。原住民が捕獲したある獲物のつがいを見たラフキンは取り乱したようにその名前を口にした。

「ハイラコセリウムだ」そしてまた、原住民との会話に戻った。

ジミーは彼が博物館に来てから起こった出来事を事細かに書き留めていた。彼にとって幸いなことには、彼のボロボロのメモ帳には、まだ十分に白紙ページが残っていることだった。だが、すべてのページが埋まるまでにここから脱出するのは難しいだろう、と私は予感した。

原住民たちはみな、私たちを名誉ある客として扱ってくれた。彼らは私たちがスーパープテラノドンを倒したやり方に驚き、私たちの服装と言葉に当惑し、アイエラを助けたことを感謝してくれた。彼女は明らかに重要人物だ。

ラフキンは彼らが話す言葉のいくつかを理解することができて、非常に気をよくしている。教授によれば、彼らの言葉は中央アメリカ原住民の言語の異形であるとのこと。彼は日が暮れる頃、他のみんなが野営と焚火の支度をしている間中、シャムルーとアイエラと座っていた。

話が終わり、ラフキンは私たちのところへやって来た。シャムルーとアイエラは席を立ち、歩いていってしまった。彼は神経質そうに眼鏡を外し、不潔一歩手前のシャツの裾でレンズを拭いた。

「いくつかのことが、わかったよ」彼は私に言った。「彼らの言語を少し解読することによって、今何が起きているのかについての情報を少々得ることができた」

「個人的には、他人の詮索は趣味じゃありませんがね」ジミーが無表情を装って言った。「とにかく、早く教えてくださいよ。さもないと、またあのプテラノ航空の空の旅に先生を招待しちゃいますよ」

ラフキンはニヤリと笑った。「ここは、言うなれば孤絶された谷なのだよ。この原住民たちはここを〝イーオドン〟と呼んでいる。主に農耕以前の段階の種族が緩やかなグループを組んで生活しているようだ。ただ、ひとつだけ、畑を耕す人々が住む〝石でできた村〟があるそうだ。ここの友人たちよりも発達した文化の持ち主だと言えよう」

「ところで、ここに集まっている人々はほとんどがクーラック族のメンバーだそうだ。アイエラと呼ばれている若い女性は、その酋長の娘……つまり、実質的には王女だな」

私はアイエラに目を向けた。彼女はその前から私を見ていたようだ。突然に目が合って慌てた様子だったが、彼女は視線をそらさなかった。

ラフキンは説明を続けた。「シャムルーだけが、バラコという高地に住む部族の人間だそうだ。だが、彼の出身地はそこではない。数カ月前に、山の中を記憶を失ってさまよっているところをバラコの人々に助けられたのだそうだ。キミが言っていた〝シャミノ〟という名前だが、それが彼に何かを訴えるようだ。だが、本人は何も思い出せないでいる。彼はキミとはどこかで知り合いだったような気がすると言っていたが、キミとは一度も会ったことがないとも言っている」

私は苦笑した。「それではまるで意味が通りませんね」

「それは結局、彼を混乱させるだけだ。ところで、アイエラはここ数日間、いやな夢を見続けているそうだ。何か昆虫のような生物によって、大変に危険な目に遭遇するという夢らしい。すると、強いが奇妙な戦士が現われて……いや、訂正させてもらおう。奇妙だが強い戦士が現われて、彼女を助けるのだそうだ。その戦士は、キミと同じ顔をしているらしい」

「少なくともアイエラは彼女の部族の間では特別な戦士の位にあるらしい。自分で狩りもする。彼女は昨日、ウラリ族という別の部族の戦士とその酋長……バカデカ・ダーデンと彼女は呼んでいたが……に襲われたそうだ。ダーデンは彼女のことを自分の女だと決め込んでいるらしい」

「彼女はなんとかウラリ族の襲撃から逃れ、再び彼らに遭遇しないように遠回りして村まで帰ろうとしたそうだ。その帰り道で、あのスーパープテラノドンに襲われたんだよ。いやあ、あれはすごかった。ケツァルコアトラスの数倍はあったね。完全な関節を備えていた。ただのグライダーではなかった」彼は夢見るように首を振った。

「そうそう、そのシャムルーという男だが、彼は彼女の部族の友人ということだった。彼女の部族の人間が、昨日から彼女を捜索していたそうだ」

彼はますます声をうわずらせた。

「彼らによると、あのスーパープテラノドンは氷山の一角だそうだよ。この谷に住む、もっと他の驚くべき爬虫類のことを話してくれたんだ。ぜひともこの目で見ておかなければな。一度に何種類もの古代生物の奇跡的生存を目の当たりにしてるようだ」

ラフキンは急に真顔になった。
「さてと……、キミがどうしてシャムルーの顔を知っていると思ったのか、ここいらで本当のことを聞かせてもらえるかね？」
私はあたりを見回した。アイエラは相変わらず好奇と驚きの目で私を熱心に観察している。シャムルーは無表情に見えたが、彼の目には苦悩が現われていた。ジミーは私と目を合わす暇もなく、私たちの会話を一言一句逃すまいと必死にノートをとっている。
私はため息をもらした。この話をマローンの前で話さなければならなくなったことを後悔した。だが、話すことにした。あらゆる事実を話すことで、ひとつの命が救われることもあるかもしれないと思ったからだ。私もそれで救われるかもしれない。
「ロード・ブリティッシュと名乗るさる高貴な人を何度か手助けしたと前に話しましたね。それは事実です。私はその人物がヨーロッパ人であり、その名前は偽名であると思わせるような話し方をしましたが、それは真実ではありません」
「ブリティッシュは、ある場所……ブリタニアと呼ばれる世界の人間です。それは我々の世界の写しのような別の世界だと、私は考えることにしています。彼の名前や、いろいろな話を総合すると、彼は私たちの世界と何らかの関係を持っていることがわかります。しかし、彼の口からすべてを聞いたわけではないので、彼自身については詳しいことは知りません」
「私はブリタニアを何回も訪れていますが、必ずムーンゲートと呼ばれる通路を通って行くことになっています。今日、研究室に現われたのも、ムーンゲートの一種です。しかし、あれはまったく異質だった。あんなムーンゲートは見たことがない。なんであんな挙動をしたのか、どうして私たちをブリタニアではなく、この場所へ連れてきたのか、私にはわかりません」
「あのシャムルーに瓜ふたつのシャミノはブリタニアの私の友人なんです。ここでこんなふうに彼に会うとは、まったく奇妙な気持ちです。記憶を失って、シャミノをシャムルーだと言ったりして……」
シャムルーは自分の名前、つまり、自分の名前ではない名前を聞くたびに、目をしばたいた。
「確かに、確証的な事実がいくつか認められる」ラフキンは渋々それを認めた。「だがそれは、本人以外には実証できないことばかりだ」
「それを実証することができたとしても、奇妙な話には変わりありません。いいですか、私は先生に信じてくれとは言っていません。ここで聞いたことは、すべて忘れてしまったほうがいいかもしれません。先生が是非にとおっしゃるから、私は真実を話したまでです。あとで私をしかるべき施設に入れようとお考えなら、その前に私に少しの時間をください」私は苦笑した。「もう二度と姿は現わしませんから」
私はちらりとアイエラのほうを見た。たちまち彼女の強い視線に摑まってしまった。「あの……、先生。現地の人たちと話をなさったとき、私がアイエラの命を助けたことで、私が何か彼女に対する責任を負ってしまったとか、そんなようなことを誰か話してませんでしたか」
ラフキンは笑ったが、私が彼に向き直ったときに、慌てて笑いを押し殺したように見えた。「それを恐れているのかね、それとも、望んでいるのかね。いや、答えんでいい。からかっただけだ。いや、そのような責任を負わせる習慣は彼らにはないように思ったがな。彼女はもうしつこいぐらいに我々に対する感謝の念を表わしていたよ。中でも特にキミに対してな。それに、彼女はキミに対して特別な関心を抱いているようだ。簡単でいいから、彼らの言葉を習っておく必要があるんじゃないかな。彼女と二人きりで話したいと思ったらな。彼女はそれを熱望しているんだがね」
私はうなずいた。「彼女に伝えて……」
私の言葉はジャングルの中から響いてきた鋭い音に遮られた。二人の戦士が立ち上がった。もう一人が唇に手を当てて、おなじような音を発した。他の連中は互いに何やら囁きあっている。ラフキンが手早くアイエラに話を聞き、すぐにまた戻ってきた。
教授は報告した。「見張りの一人が動物が近付いていることを知らせてきた。〝盾背〟と彼らが呼んでいる生物らしいんだが、ぜひとも見ておきたい」
彼が立ち上がると、アイエラが彼に何かを伝えた。がっかりした表情で、彼は言った。「あれは草食動物で、火や人間には決して近付かないんだとさ」

「かわいそうな先生。でも、きっとサンタさんが先生の靴下に恐竜を突っ込んでくれますよ」ジミーがちゃかした。
ラフキンは歯を剝き、ジミーは声をあげて笑った。そのとき、ジャングルの中の原住民が叫んだ。
私たちは全員が飛び上がった。原住民たちは手に手にスピアや弓を取った。
火の明かりと闇との境界線の向こうから、巨大な牛の鼻息のような、フーッ、フーッという音が聞こえてきた。そして、幽霊牛が明かりの中に顔を出した。
〝盾背〟は、体長が長く、幅が広く、平たい感じの背中に突起が並んだ爬虫類だった。アメリカ南西部に棲むツノガエルに似ているが、馬鹿でかい。大型の高級車よりも大きいだろう。これは作り物ではない。特撮でもない。本当に生きて、私たちに向かって歩いてきている。
それが光の中に進むにつれ、その口から何か植物のつるのような、ロープのようなものが出ているのが見てとれた。あれは……。
「手綱だ」ラフキンが声を殺して言った。
彼の言う通りだった。その背中には人影があった。NFLのディフェンスのラインマンなみに大きく肩幅の広い男だ。
アイエラが命令の言葉を発した。私には、その中の一語だけ聞き取れた。「ダーデン！」憎まれた求婚者、敵部族の酋長ダーデンだ。
ダーデンはアイエラに答えて叫んだ。腹の底から響くようなバスだ。それに続いて、無数の応答がジャングルから響いてきた。ジャングルの中に、ダーデンの戦士たちが待機していたのだ。彼らは機敏な動作で姿を現わしたかと思うと、酋長が乗った恐竜の前に隊列を整えた。
アイエラ側の戦士たちは、目に恐れを浮かべてうろたえた。巨大な恐竜を自在に操ることができる男に対する恐怖だ。これだけ怯えてしまっては勝ち目はない。私にはわかっていた。そこで私は、理性が本能に追い付くより速く、うろたえた戦士からスピアを奪い取り、ブリタニア式の雄叫びをあげながらクーラック族の戦列を割って前に出た。
敵は簡単に勝利すると高を括っていたのだろう。クーラック族は恐竜とそれに乗った男に腰を抜かすはずだと考えていたに違いない。私は彼らが自分たちの誤りに気付く前に攻撃を開始した。最初に対決した戦士の攻撃は単純だった。私は彼の攻撃の方向をかわし、代わりに一撃をお見舞いしてやった。胸の真ん中に強烈な突きを喰らって、彼は勢いよく地面に倒れた。
だが、このジャングルの民は反応が素早かった。私はたちまち、スピアを構えた険しい目つきの男たち数十人に取り囲まれてしまった。私は防衛に専念させられた。突き出されたスピアをかわし、別のスピアをブロックし、戦士の膝の脇を思いっきり蹴りつけた。関節が砕ける音がして、戦士は苦痛の叫びをあげて地面に倒れた。私は快感を感じた。

その頃になって、クーラック軍はようやく目を覚ました。彼らは矢の雨を浴びせかけ、ダーデンの軍勢を押し戻した。スピアを持った味方の戦士が私の両脇を固めるようにして隊列を組んだ。その間、弓矢を持った戦士たちが第二波の攻撃準備を整えた。

敵があの戦士たちだけなら、我々は完全に彼らをジャングルの中へ押し戻し、ズタズタに引き裂いていたことだろう。ところが、私が二人の敵を倒し、味方の戦士が応援に駆けつけたとき、筋肉男のダーデンが恐竜の速度を速めたのだ。

恐竜は大股で地面を蹴る。ダーデンは手綱を引いて、その頭を私たちに向けさせた。巨大なトカゲが突進してくる。あと6メートル……3メートル……。

4トンもあろうかという肉の塊の猛チャージを喰らえば、アイエラの戦士たちと言えども隊列を保つことは難しい。私は彼らに隊列を二手に分けて恐竜を囲み、両脇から攻めるように指示しようと口を開いたが、言葉が出なかった。

私の視野の片隅にスピアが飛び出した。かわそうと試みたが、十分には果たせなかった。石の穂先が私のこめかみをかすった。それによって私の体は硬直し、よろめき、後退させられた。

私の目に見えたのは、恐竜がさらにスピードをあげ、クーラックの隊列を破り、戦士たちを追い散らし踏みつけて突進してくる姿だけだった。私の意識は朦朧としたままだった。足も動かない。私は、ダーデンが恐竜の首を私に向けるのをただ眺めるだけで何もできなかった。それは一歩ずつ近付いてくる。ついに恐竜の頭が私の顔の上に差しかかった。冷酷な笑いを浮かべたダーデンの目が見えた。そして、彼のハンサムな顔が勝利の笑いに歪むのが見えた。

だが、予期したとどめの一撃を自分の目で見ることはできなかった。恐らく私は、恐竜に蹴飛ばされたのだろう。覚えているのは、私の体が後方に飛ばされて、またもや木の幹に激突し、根元に墜落したことだけだ。

そこで死んでもおかしくなかった。むしろ意識を失ったほうがよっぽどましだった。体を動かすことも、話すことも、自分が呼吸をしているのかどうか確かめることすらもできないでいたにもかかわらず、私の目には目の前の光景が飛び込んできたのだ。

私が見たのはアイエラと恐竜に乗ったダーデンが並んでいるところだった。アイエラは弓を引き、真っ直ぐにダーデンの喉を狙っていた。これでヤツもおしまいだ、と私は確信したが、そうではなかった。

アイエラの背後からウラリの戦士が一人忍び寄ってきた。彼はスピアの柄で彼女の頭を殴った。アイエラはその場に倒れ込み、矢はあらぬ方向に飛んでいってしまった。そこからダーデンの顔は見えなかったが、まだあの勝ち誇った笑いを浮かべていたことは確かだ。一人の戦士が気絶したアイエラの体をダーデンに差し出したとき、一杯に歯を剥き出して、笑いは最高潮になっていたことだろう。

最後に見たものは、〝盾背〟とその高価な〝荷物〟が揺れながら夜の闇に消えていく光景だった。やがて私は闇に包まれ、深く暗い昏睡状態に陥っていった。

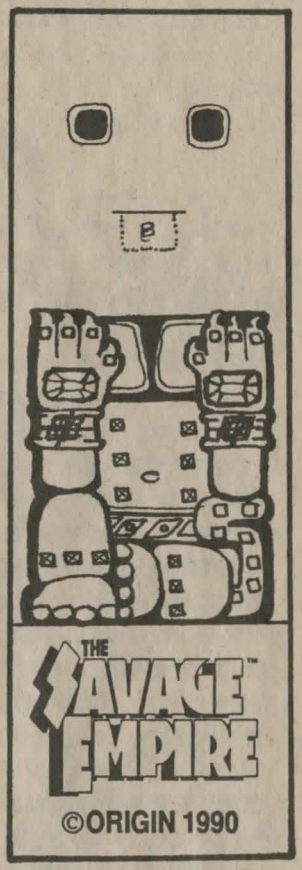
次号は……第2章：奇妙な再会
をお送りします。

エースのメモ帳

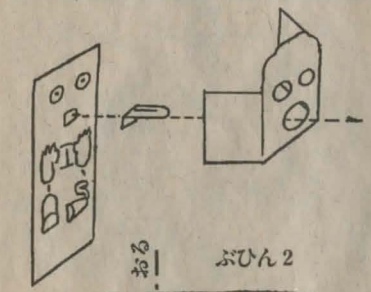
学生さんも兵隊さんも人類学者も冒険家もジャーナリストも何でも屋さんもメモ帳ならエースです。耐水性の表紙、破れにくい用紙、頑丈な螺旋綴じ。あらゆる状況下において、エースメモ帳はパーフェクトにお役に立ちます。エースのレポーター、ジミー・マローンもこう推薦しています。
「他のメモ帳なんか使えないね！」

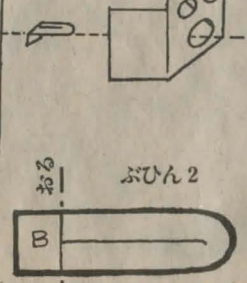
HEY, KIDS! みんな！

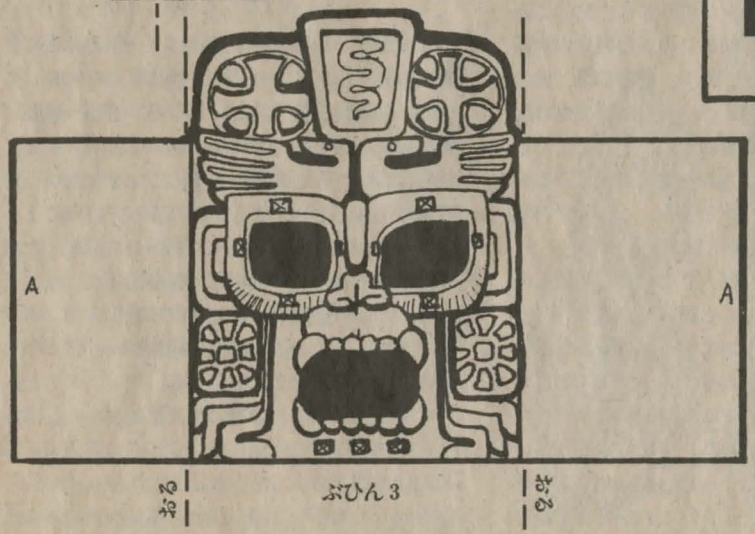
サベージ・エンパイア・ブックマークをつくろう！　まず、このページをコピーして、それをあつがみにノリづけします。マーカーなどですきないろをぬってください。3つのぶひんを切りぬきます。ぶひん2をてんせんにそってやまおりにして、Bのぶぶんをぶひん1のBにノリづけします。ぶひん3の目と口のぶぶんを切りぬき、ぶひん1にかさね、ぶひん1をつつみこむようにてんせんにそっております。このとき、ぶひん2がぶひん3の口からでるようにしてください。ぶひん1のうらがわでかさなるぶひん3のAのぶぶんを、テープでとめます。このとき、テープがぶひん1にはみださないようにちゅういしてください。さあ、これでかんせいです。ぶひん3のぶぶんをスライドさせると、ゴールデン・ジャガーぞうの目がうごきます。



ぶひん1







このページは自由に複写できます

SOME REFLECTIONS ON THE FLOLA AND FAUNA OF THE VALLEY OF EODON

エリオット・アルキメデス・ラフキン教授

イーオドンの谷の動植物に関する考察

この記事は、イーオドンの谷にとどまる決意をされたラフキン教授から本誌に送られたノートの内容を書き写したものです。(編集部)

ある人間が、その個人的業績によってではなく、むしろ千載一遇の幸運を掴んだことで歴史に名を残すとしたら、なんとも心痛い限りであるが、思うに今の私がその境遇にある。いずれにせよ、科学界は私がこの驚嘆すべきイーオドンの谷の唯一の記録者であることを認めることになる。私にはその資格が十分にあると、絶対の自信を持って宣言する。さしづめ私は原始時代のジョンソンにとってのバズワースといったところか。それにしても、これはまったくの幸運だった。この谷を私に発見させたのは、科学的研究の結果でも人類学的探検の結果でもなかったからだ。

友人のジミー・マローンが言うには、私のこの記録が日の目を見る前に彼はこの谷の発見の物語をまとめて出版する予定であり、その結果、彼のボロ手帳の残り少ない白紙ページに私が発見の記録を重複して記載する必要はない、と教えてくれた。そこで私は、当初の方針を変えて、この谷の全体像を簡単に説明したいと思う。この七珍万宝の環境を世界の誰よりも早く諸君にお教えしよう。また将来、もし可能ならば、さらに詳しい内容のエッセイをお送りできたらと願っている。

イーオドンの谷は科学者にとって貴重な宝や決定的な情報が詰め込まれたタイムカプセルのような存在だった。しかし、そこに構造的欠損が生じたため、外の湿気が流れ込み、中の貴重な資料のいくつかが破壊されてしまった。我ながら実に巧い比喩であると思うが、まさにこれが真実を描写しているのである。この私に与えられた少ない紙面で、私はその〝宝〟を見つめ、その起源とそれらが受けた異変を探る仮説を導き出したいと思う。

イーオドンの人々

イーオドンの谷に住む人々は、一部の非常に貴重な例外を除いて、いまだに農耕革命を体験していない前農耕民族である。マローン君の一般向け雑誌の読者諸君のために噛み砕いて説明すると、彼らは自分たちで食糧を育てることをしない、狩猟採取民族だということだ。つまり、狩りによって手に入れた獣の肉を食べ、原野から採取した野生の植物や木の実や果物で栄養を補っているのである。この一般原則に反した例外的存在は、ナウワトラ族である。彼らは他の種族グループよりも幾分進歩しているように見える。

どちらにせよ、この谷の住人はみな小さな部族グループを作って生活している。どの部族もその起源は地球上のまったく異なる地点と思われるが、彼ら同士に明らかに相当程度の類似性が認められる。現在では、ほとんどの部族が非常に類似したほぼ共通の生活様式を持つに至っている。

各部族は世襲酋長制によって統治されている。酋長は部族の政治的指導者であり、部族民同士の争いの調停者であり、頻繁に発生する部族間紛争の指揮官であり、来訪者や来賓を迎える部族の代表でもある。

部族の統率のかなめには、もうひとり非常に重要な存在として心霊的指導者である〝祈とう師〟がいる。部族の祈とう師は谷の住人に崇められている特定の〝自然の精霊〟の意志を人々に伝えるという重要な儀式を司る。この儀式についてはあとで詳しく述べる。祈とう師はまた、酋長の相談役であり、婚礼（婚姻の正当性について精霊の承認を得る儀式）をとり行ない、さらに部族で最も位の高い医師ともなる。

酋長と祈とう師より下位に並ぶ部族民の身分階級は私のような外部の人間には詳しく判別することは難しい。ただし、戦士は部族の中で特別な地位にあるようだ。彼らは、ジャガーのようなジャングルの獣に対して特別な絆のようなつながり、あるいは類似性を備えている。男性が女性に接近する権利を得る方法は部族によって異なる。いくつかの部族では、明確な男子家長制度があり、女性は二級市民と見なされている。反対に完全な女子家長制度を持つ部族が少なくとも一部族存在している。その他の部族では一般的に女性の地位は低いが、特に高い技能を有する場合は、女性でも戦士になることが許されている。

長年にわたって部族同士の近親化は相当程度進行しており、他部族民同士の混血化によって、外世界の故郷の文化を純粋に受け継いでいる部族を見つけることは難しい。しかし、多くの部族は数百年にわたって独自の人種的文化的特徴を受け継いでおり、彼らは実に魅力的な調査対象となっている。また、その起源を推測するのも興味深い。

それぞれの部族を個別に紹介する前に、この世界の人々に関して、私が最も感銘を受けたことについて語らせていただきたい。それは、容易に予測がつくことではあったが、それを認識したあとでも、いまだに私の心を掴んで放さないこと……つまり、この自然環境に彼らが順応してきた過程である。有史以前の爬虫類や太古の獣たちがひしめくこの土地で、彼らの文化、図像法、民間伝説などがこの環境をみごとに反映している。

たとえば、ある部族の酋長の精巧な頭飾りは巨大なプテラノドンの頭蓋骨とクチバシから作られていた。部族の領土の境界を示す木製のトーテムポールは肉食恐竜の特徴を表現している。戦士たちは650万年前に絶滅したと信じられていた恐竜の皮で作った盾を持ち歩いている。洞窟の壁画には戦士たちがトリケラトプスやアンキロサウルスと戦っている姿が描かれている。このような当事者である原住民も意識しない日常的な光景はこの人類学者にとっては驚異でありこの上ない喜びである。願わくば、これから先、時間の許す限り私はこれらを研究していきたい。そして、さらにこの分野に関する見識を深める喜びを味わいたいと思っている。

この谷のすべての人間は共通の言語を話している。いくつかの語源となる言語が混合されてできた言語だと思われるが、その中心になっているのは中央アメリカのナウワ語である。部族ごとの方言を調べると、意外にそこに彼らの真の起源を見ることがある。

ナウワトラ

ナウワトラ族は間違いなくこの谷の外の世界であるアステカ文化の流れを受けている。これは私の持論だが、ナウワトラとアステカはひとつの文化が起源になっている。その文化圏の人々が遥か昔にこのイーオドンの谷に移住してきたに違いない。〝ナウワ〟とは、

まさにアステカ人が話していた言語の名称そのものなのだ。

ナウワトラは外世界におけるその兄弟と同様、壮大なピラミッド、寺院、住居などの建造物を石で作っている。金製品も作る。太陽に対してある種の敬意も払っているが、ナウワトラの場合は太陽を神格化したり直接的に崇拝するようなことはない。彼らは他の部族と同様に谷の精霊を崇拝しているのであって、そこがアステカ人と異なっている部分だ。しかし、ごく最近までのナウワトラの指導者の行動から、人間をいけにえにする習慣がかつてはナウワトラにもあったことが確信できる。

彼らは、他の部族と比較して技術力において、幾分進歩している。伝統的に武器は石で作り続けてはいるが、装飾品には銅や青銅の細工が見られる。そして、彼らは紛れもなく農耕民族である。彼らは食糧のほとんどを自ら栽培し収穫している。狩猟と採取はごく一部の補助的食糧を得るために行なわれているに過ぎない。

ヨラルー

イーオドンの谷でも最も深いジャングルに住む黒人部族である。彼らの起源がアフリカであることは明白である。だが、アフリカのどの地域からやってきたかは、私には特定も推測もできない。

私はしばらくの間ヨラルー族と生活を共にする機会に恵まれたのだが、そこで感じたことは、彼らはこの谷のどの部族よりも文明化されているということだ。文明と言っても、技術的に発展しているというのではない。洗練された部族の法律を有していることや、他部族に対する理解の寛容さを意味しているのである。

イーオドンの共通言語におけるヨラルーの方言にはバンツー語の要素が含まれていると、私は分析した。また、彼らが好んで使用する武器には大方の予想通りスピアやナイフがあるが、ヨラルー戦士の中には石の突起を埋め込んだ大きな棍棒を使用する者もいる。

バラコ

谷の北方に住むバラコ族を観察する機会は残念ながらこれまであまりなかった。彼らは高地民族であり、切り立った岩場を生活の場として好む。また、厚い毛皮を全身にまとっている。戦士たちが衣服にしている毛皮はバラコ族の山々に多く棲息する熊の毛皮であることから、彼らは非常に勇敢な部族だと言える。なぜなら、彼らはどんなに強い獲物に対しても、素朴な弓矢一本で立ち向かっていくからである。木の棍棒も使用するが、それは非常用に限られる。

バラコ族は母系社会である。部族の長は女性酋長から女性酋長へと引き継がれる。他の部族でも何らかの理由で女性が酋長になった例はあるが、バラコの場合は酋長は女性であることが原則なのである。

人種はコーカサス系。排他的（谷の部族の中で最も独立性の強い部族である）、攻撃的であり、部族民は非常に強い家族意識のもとに結束している。共通言語における彼らの方言は他のどの方言よりも原始インド・ヨーロピアン語族の特徴を強く含んでいる。そのため、彼らは有史以前のヨーロッパから渡ってきた民族であると推測される。

バラップ

この失われた谷でも辺境地域にあたる台地の頂上に住む珍しい種族である。肌は黄色、目にはわずかに蒙古ひだが認められる。これらの人種的特徴と共通言語における非常に特徴的な方言を総合して考えるに、彼らの起源は数百年前のアジアの東部および東北部であると推測される。

バラップは他のどの部族よりも高い地域を生活の場にしている。彼らの指導者になる者は現世的政治手腕と霊的能力を合わせ持っている必要がある。すなわち、酋長は同時に祈とう師でもあるのだ。バラップ族は登山の名手である。彼らの軍事コンサルタントを務めたこともある私の友人の話では、戦闘でバラップたちは高いところに登り、敵の上へ雨のようにスピアを降らせる作戦を好むという。また、スピアを遠くに投げる道具であるアトルアトルを使用することもある。

彼らは礼儀正しく、いろいろな面でヨラルー族に近い文化程度を有しているが、ヨラルーのような他部族との交流は少なく、むしろ排他的なところがある。

ディスキキ

ディスキキ族の共通言語における方言からは、事実上、何の手掛かりも得られないが、明らかに南太平洋の種族が共通して持っている文化的特徴が見受けられる。性格は無責任で、他の部族から敬遠されがちな人々ではあるが、当人たちは実に陽気で音楽好きで谷中で評判の色好きである。

祝宴などにおける彼らの振舞は滑稽であり、ときには奇異であるが、彼らの祝宴に出るたびに、私はキャプテン・クックがどこでどのような死に方をしたかを思い出す。ディスキキの人々と取り引きをするときは、私は決して油断をしないことにしている。

ジュカリ

ジュカリは活発に活動する火山地帯に住む敬けんな苦難の部族である。彼らの生活は食糧を確保すること、火山学者が垂涎しそうな活火山地帯で大地を揺さぶり山から〝火を吐かせる〟精霊をなだめること、敵対する近隣部族のハークール族との準戦闘状態を保つことという三つの単純な作業に集約されているように思える。

ジュカリ族は谷の部族の中でも最も原始的な部族に属する。彼らの方言からは、その起源を推定できるだけの手掛かりは得られない。

クーラック

この失われた谷にあって、最も興味深い文化を持つ部族である。もともと、南米のインディオが起源と思われるが（少なくとも彼らの方言がそうである）、他部族との交流が最も盛んで、その恩恵を大きく受けている。言い伝えによれば、彼らは他の部族から追放された者、中でも追放された戦士や逃亡者を多く受け入れてきたとのことだ。これによりクーラック族は多彩な遺伝子の宝庫となり、人種の〝るつぼ〟的部族として知られるようになった。

ジャングルの奥に住むクーラック族はジャガーを信仰の対象としている。また、部族の特定の人間は野生のネコ科動物と意思の疎通がはかれる能力を開発している。

彼らはスピアや弓矢の狙いが非常に正確で、神出鬼没の戦士としても知られている。長い間、ヨラルー族と戦争を続けてきた歴史があるが、クーラックとヨラルーは色々な面において類似点の多い部族である。

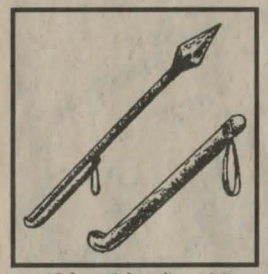
WEAPONS OF THE TRIBES

部族と武器

すべての部族には身分階級がある。酋長を頂点に、祈とう師、酋長の子供、年老いた戦士などなどと続くが、イーオドンの谷に住む人々は武器にも序列があると信じている。

ある一面では武器の序列は具体的な根拠に基づいている。たとえば、石の短剣よりもスピアのほうが大きな攻撃力を有することから、スピアのほうが短剣よりも〝強い戦士〟と見なされるのである。また、霊的側面からの序列もある。精霊と波長の合いやすい武器が数種類あるのだが、それらなどは位が高い。

谷の人々の間では、ナウワトラの石の剣が武器の〝酋長〟とされている。そして、広く愛用されている投槍器〝アトルアトル〟は祈とう師である。



アトルアトルとスピア

それに続く武器の価値序列は次のとおりだ。力の強い戦士が愛用する大型の両手式棍棒、手投げスピア、多くの戦士が使っている石斧、ほとんどの戦士が戦争と狩りの両方に使用する原始的な短弓、木の棍棒、ロックハンマー、片手棍棒、武器と言うよりは道具に近い非常に鋭利なナウワトラの石のナイフ、そして一番下が比較的珍しいブーメランとなっている。

多くの部族が使用し、特にウラリ族の刺客が使うことで恐れられている吹矢は〝番外〟とされ、武器階級の中にはその地位がない。吹矢の矢そのものは武器としては非力であるが、それに毒を塗ることによって、吹矢はいかなる状況においても危険すぎる程強力な武器となる。一般には、緊急時以外は使用しない。

ナウワトラの石の剣

防具やシールドにも階級的序列がある。ステゴサウルスの背中の骨質板で作ったシールドが防御の部の〝酋長〟である。動物の皮のシールドは樹木の皮のシールドよりも位が高いが、どちらも布製のシールドよりは強い。

現代人がイーオドンの谷に迷い込んだことによって、20世紀の科学技術の産物に影響を受けた原住民たちの武器事情も変化してきた。高性能の狩猟用ライフルは例外なく谷で最も強力な武器となった。この土地で集めた材料を使って私が製作した粗末なマスケット銃や手投げ爆弾ですら、彼らの古来の武器よりも遥かに強力であり、意外に役に立ってくれた。私たちと共にこの土地にやってきた研究所に備え付けておいた頑丈な消防用斧も地味ながら有用な武器となってくれた。もっとも、それが最も威力を発揮したのは谷で一番高く堅い木を切り倒したときだ。これには、どの部族のどの道具も太刀打ちできない。また、アバタールが持っていた鉄製のボウイナイフも、原住民が使用しているカミソリのように鋭い石のナイフよりもわずかだが優れていた。

ピンディロ

ピンディロが北米インディアンの一部族あるいは数部族の遠縁であることは、ほとんど間違いない。方言の中のいくつかの言い回しはスー語族を思い起こさせ、遊牧的平原民族の生活様式も彼らの起源を暗示している。

ピンディロ族は現在の馬の祖先にあたるエオヒップス、いわゆる〝ヒノデウマ〟に対して非常に親近感を抱いているようだ。中型犬程度の大きさの哺乳類で、ピンディロ族が住む平原に非常に多く棲息している。肉や毛皮を取るために狩ったり、罠で捕えたりするが、ペットとして飼われたりもしている。

面白いことに、ピンディロ族は構造的に男子家長制社会であるにもかかわらず、多くの女性酋長を出している。現在、これを執筆している時点での酋長も女性である。

ウラリ

私が最も腹立たしく思う部族……個人的にも学術的にも腹立たしく思っている……は、ウラリ族である。これ以上謎めいて排他的な文化を他に探すことは難しいだろう。

ヨラルーとクーラックの言い伝えによれば、彼らはかつて、ナウワトラの東、谷の中央部にある湿地帯に住んでいたとされている。しかし、数百年間をかけて湿地帯は次第に乾燥し、彼らの生活範囲が狭められてしまった。ウラリ族にとって最も快適な生活環境は沼に囲まれていることなのである。

さらに言い伝えによれば、あるとき、ウラリ族は部族ごと消えてしまったそうだ。それ以後は、非常に長い間、ウラリ族の消息はわからないままだった（現地の人間は消息を絶っていたのは1000年間だと主張しているが、それは疑わしい。そのような古代からの言い伝えによる数字の誇張は10で割った数が妥当であることが多い。したがって、恐らくは100年程度のことだったろう）。

ウラリの若い世代なら渋々ながら認めるであろうが、その当時、彼らの調査隊が最も大きな沼のある場所を発見し、そこへ部族ごと密かに移住したのである。数年前、ウラリ族から追放された人間が見つかり、ウラリ族がまだ健在であることはその当時からわかったのだが、数カ月前からウラリ族と他の部族との接触の機会が増してきた。あろうことかウラリの酋長は部族の人々を操って、他の部族への侵略を始めたのである。

しかし、ウラリ族は依然として謎に包まれている。彼らは、彼らの沼に囲まれた隠れ里への行き方をいまだに口外しようとしない。わかっているのは、そこは彼らが昔住んでいた場所からそう離れていないということだ（もし遠く離れた場所であったなら、他の部族の言い伝えに彼らが消えたと語られる前にどこかへ移住していく彼らの様子が語られるはずだからである）。

外の世界のどこに彼らの起源があるかを推測するのが非常に難しく、むしろ不可能である。そのため、学術的な立場においても、私は彼らを腹立たしく思うのである。強盗、浮浪者、追放者の登場頻度が圧倒的に多い彼らの言い伝えや、方言や人種的特徴の混交具合、それにその他のデータを総合して考えるに、彼らはこの谷を起源とする種族であると推測される。身の安全を確保するために沼地に逃げ込んだ逃亡者たちが集まってできた種族ではないだろうか。そのことから、彼らの疑い深い民族的特質の原因が説明できる。しかし、これはあくまでも仮説に過ぎない。ウラリ族の真の歴史をたどるのは、非才な私ひとりの手には負えない。もっと多くの優秀な言語学者と人類学者の助けが必要である。

ハークール

最後にとっておきの部族、ハークールを紹介しよう。私の第一印象では、彼らが、不格好で異常に毛深いこと、そして特徴的な顔つき（張り出した顎、眼窩上の突起、大きな鼻）をしている要因は近親交配と恐らくは文化的淘汰の結果であろうと思えた。

しかし、それは正しくなかった。以前、怪我をしたハークール族の戦士を診察したのだが、私が特に注目したのは、頭蓋骨の大きさ（脳の容積は

ホモサピエンス・サピエンスのものよりも大きかった)、表現力に乏しい声帯、思考パターン(他の部族の人間に比べて、論理性に乏しく、極端に直観的で本能的である)であった。そこから、ひとつの明確な結論が導き出された。私の目の前で生きて生活しているのは、ホモサピエンス・ネアンデルタレンシス、つまり、外の世界では3万年前に姿を消したネアンデルタール人だということだ。

もし私が診察したハークールがこの驚異の生存を証明する唯一の証拠であったとしたら、身体的条件と生まれ育った状況によって、たまたま、それまで隔絶されていたネアンデルタールの肉体的特徴を保存していたポケットが口を開き、このような人間を作ってしまったと解釈し、喜んで彼を帰したことだろう。しかし、下でも述べているように、生き残りは彼が唯一ではなかった。

皮肉なことに現代人類学では、ネアンデルタールは現代人が強く頭に描いている野蛮で膝の曲がったいわゆる〝原始人〟の姿よりも、もっと背筋が立っているとされていた。事実、きれいに髭を剃り、体によく合った服を身につけたネアンデルタールの姿は、現代人にとっては少々うんざりするほど陳腐なイメージだが、ハークールはむしろそんな固定的イメージに近い姿をしている。数千年におよぶ近親相姦と遺伝性関節炎によって、イーオドンの谷のハークール族は、低俗な恐竜映画の通行人に瓜ふたつの背中と膝が曲がった〝原始人〟になったのである。

人々の心霊主義

人はパン……谷の原住民の場合は主食は肉だが……のみにて生きるにあらず。この谷では人々の文化の大きな部分を心霊的な要素が占めている。

それぞれの部族には、ひとりの祈とう師と2～3人の弟子がいて、谷に住むと信じられている自然の精霊との交信を職務としている。精霊との交信には様々な目的がある。助言を求める、問題が発生した場合に解決のための勇気と健康を祈願する、信仰の対象となっている動物の殺害の許しを得る、将来を占う、などである。

これらはすべて、ともすると平凡な光景に見えるかもしれないが、儀式が求められた現象を現実に引き起こすという点で特異である。祈とう師たちは純情な同胞たちに対して〝呪術〟としか思えないような技を披露することに非常に長けているのである。

〝呪術〟を演じるには、祈とう師は呼び出したい精霊の像が刻まれた小さな石を差し出し、その精霊の好物を捧げる。たとえば、ひと掴みの穀物を風の中に撒く。そして、祈とう師は呪文を唱えながら精神を集中させ、あるいは瞑想する。すると間もなく、面白い現象が現われるのである。

勘違いをしないでいただきたいが、この谷では、祈とう師本人も含めてこれをインチキやペテンであると疑う人間はひとりもいない。無意識のうちに集団催眠術を使っているのか、ヒステリーの兆候を作り出す生物理学的手法を使っているのか、その他の方法を使っているのか、それは明らかではない。彼らの〝呪術〟の原理はまったく不可解であり、それでいて、いくばくかの信頼性がある。私は何人かの怪我人や病人の治療を観察したが、それが無意識の集団催眠なのか、祈とう師の〝ヒール〟を受けたあとに奇跡的に回復する生物理学的効果なのか、ほとんどのヒーリングが明らかに患者本人の精神に働きかける形で行われているため、それを確かめる方法はないが、いずれにしても、私がこれまで見たことのある月並みな催眠療法とは比べものにならない程の治療効果が認められた。

これは非常に魅力ある現象である。今後、数年間かけてじっくり研究してみたい。

イーオドンの動物

私に与えられたマローン君の〝伝説〟のメモ帳の残りページがいつなくなるか、私は戦々兢々として筆を進めている。恐らく残りの報告に関しては、内容を蒸留してお伝えする努力が必要とされるだろう。そこで、この谷で見られる最も一般的な動物たち……非常に多種類の蛇(そのほとんどがマムシの仲間で大型の蛇は見られない)や、ここの環境に実にみごとに順応している大きくて美しい黒豹、非常に多種類のオウムなどなど……の紹介はこの際省略して、それよりむしろ、特殊な動物たちに焦点を当てようと思う。

また、イーオドンの谷の洞窟に棲息する多彩な巨大蜘蛛についても、ほんの少ししか触れられないのは実に残念だ。それは巣を張る種類の蜘蛛で非常に大きい。私が目撃したサンプルの場合は足を広げると180センチメートルもあった。彼らは谷の洞窟を占有して生活しているが、巣にかかる獲物に頼ることはしない。夜間に食糧を求めて巣を出るのである。私はまだ、これらを詳しく観察する機会に恵まれていないため、その起源について科学的考察を行うことは今はできない。

前に古代生物の〝生き残り〟について述べたが、この谷には外の世界での絶滅の災禍に遭わずに生き延びている動物たちがいる。

生き残り動物には多くの種類がある。ここではいくつか掻い摘んで、簡単に紹介しよう。ここに挙げる動物を見て、諸君は間違いなく、そんな馬鹿なと嘲笑されることだろう。科学に詳しい諸君らに対して、私が本気でこんなことを言っているのかと……。しかし、権威ある科学者たちがここを訪れ、私が目にしたものを実際に見れば、彼らの顔から嘲笑は消えてなくなるだろうと私は確信する。

イーオドンの谷で見られる動物には、次のような種類がある。

アロサウルス

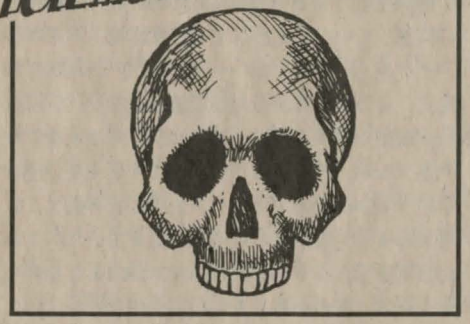
アロサウルス科。アロサウルスはジュラ紀後半から白亜紀の前半(約1億4400万年前を挟む時代)に棲息していた二足歩行する肉食恐竜。体長は12メートル、体高は4.5メートル、重さは(足跡を測定し、そこから算出した推定値として)1.5トン。私が観察した限りでは、アロサウルスは単独で狩りをするが、アパトサウルスのような大型の獲物を狙うときは数頭がグループを組んで行動することもあると、原住民が強く私に訴えていた。これが真実を伝えようとしたものか、私のような無知なよそ者に警告を与えるためのものなのか、私にはわからない(だが実際に、私への警告としての彼らの意図は達成されたと言える)。

アルファドン

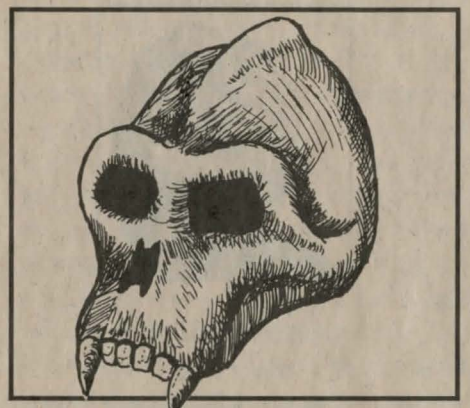
全獣目。白亜紀後半(約6500万年前)に棲息した原始的な哺乳類。外見上はコモリネズミに似た体長90センチメートルほどの有袋類と考えられていたが、イーオドンの谷では外の世界での現代のネズミと同じような生態的位置を占めている。頭がよく、雑食性で樹上生活に長けている(把握作用のある足と尾を持つ)。群れを作ると、非常に危険な存在となる。

TOTEMS AND OFFERINGS

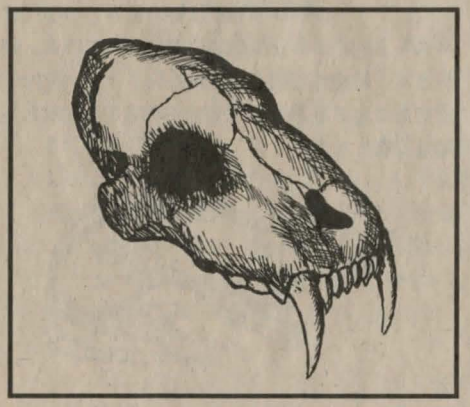
トーテムと捧げ物



ヘルズのトーテム
知識と視野の精霊



アファズのトーテム
情緒と強さの精霊



モタズのトーテム
戦闘の精霊

イーオドンの谷の祈とう師は〝呪術〟の効果を引き出すためにトーテムと捧げ物を様々に組み合わせて使用する。

自然の精霊の象徴であるトーテムには、人間の頭蓋骨、ゴリラの頭蓋骨、ジャガーの頭蓋骨の三つがある。人間の頭蓋骨はヘルーズと呼ばれる知識と視野の精霊のトーテム。ゴリラの頭蓋骨はアファズと呼ばれる情緒と強さの精霊のトーテム。ジャガーの頭蓋骨は戦場を支配すると原住民が信じる精霊のトーテムである。

儀式で風の中に撒かれる捧げ物には、原住民がチョコラトルと呼ぶテオブロマ・カカオ、幻影と知力を高めるために使用するバニステリオプシス・カーピ(原地名パインド)、そして、ヨポと呼ばれる猛毒のバイロラ・カロフィラがある。

三つのトーテムと3種類の捧げ物を使って、合計9種類の組み合わせができる。それが〝呪文〟の役目を果たすのである。

知識と視野の精霊〝ヘルズ〟の呪術

人間の頭蓋骨とチョコラトル：

数分間、照明として十分な光を発する。明るさは松明と同等なので、特別に役に立つという程のものではない。この光がどのようにして生み出されるかは謎である。

人間の頭蓋骨とパインド：

術が効いている間、術者は魂の鷲となって肉体を離れ、高空から地上を見渡すと信じられている。迷信はどうであろうと、この技を使用した人間が本人の記憶や経験からだけでは推測し得ない周囲の状況を感知するという、驚くべき事実を私は目撃している。

人間の頭蓋骨とヨポ：

術が効いている間、術者本人が自分の周囲の敵対する意識を察知する能力を身につけると信じられている。明らかにこれは、人間の心理や動物の生態に関する知識を自己催眠によって高めているに過ぎない。だが、察知の結果は実に正確である。

情緒と強さの精霊〝アファズ〟の呪術

ゴリラの頭蓋骨とチョコラトル：

一時的に敵が同士討ちをするように仕向ける術である。これなどは明らかに催眠術である。

ゴリラの頭蓋骨とパインド：

仲間の怪我や病気の症状を緩和させる術である。この効果が単に精神身体医学的な働きによるものか、パインド自体に治療効果があるのか、定かではない。

ゴリラの頭蓋骨とヨポ：

恐らく、その効果が最も疑われる呪術である。原住民はこれによって術者を中心とするその仲間全員の体が保護されると信じている。明らかに誤りだ。実際に私は、この呪術の〝保護〟を受けた人間が悲惨な怪我を負ったのを見ている。祈とう師に百歩譲って、この呪術に何らかの保護効果があったとしても、それは人々が思っているより遥かに小さいものだ。

戦闘の精霊〝モタズ〟の呪術

ジャガーの頭蓋骨とチョコラトル：

これらを使って、術者は戦闘力となる一頭の動物を送るようモタズに祈願する。この術に限らず、モタズを使用する呪術は戦闘中でのみ効果を現わすそうだ。私が会った祈とう師はみな口を揃えてそう主張している。私個人はチョコラトルの独特な匂いと戦闘の音に動物が引き付けられて現われるのだろうと解釈している。しかし、不思議なことに、必ずと言っていいほど、その動物はこちらに味方してくれるのである。

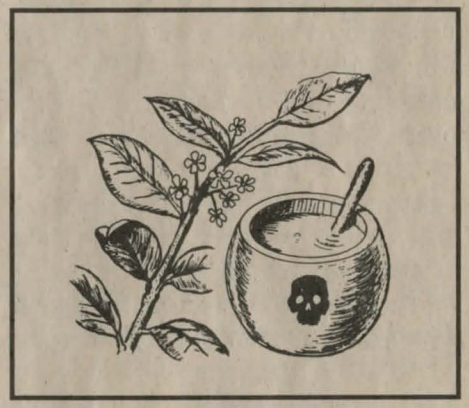
ジャガーの頭蓋骨とパインド：

敵を〝呪う〟ときに使用する。カリブ地域のブードゥー教の呪術に似て、その効果は術者の〝力〟よりもむしろ術をかけられる側の恐怖心が引き起こすと考えられる。

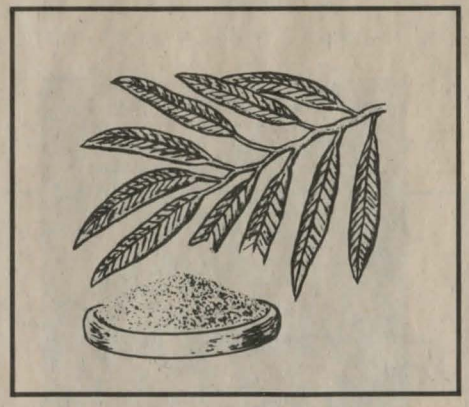
ジャガーの頭蓋骨とヨポ：

〝呪い〟と対をなす術である。祈とう師の仲間の士気を高め、彼らを狂暴な戦闘機械に変身させる。

チョコラトル



パインド



ヨポ

アンキロサウルス

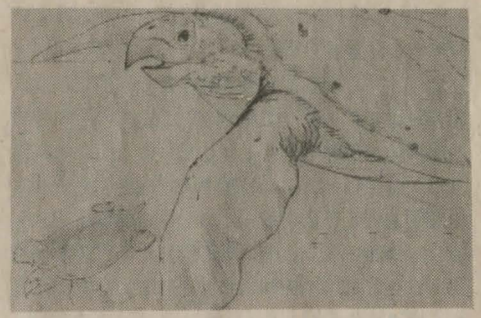
アンキロサウルス科。白亜紀後半（約6500万年前から恐竜時代の終わりまで）に棲息した鎧のような背中を持つ背が低く鈍重な恐竜。草食性で、４本の足で歩き、尾の先の棍棒のように大きく膨らんだ部分を使って身を守る。体長約5.5メートル、体重約３トンにまで成長する。大きさ重さ共にちょうど乗用車ほどだ。私は一度だけ小型のアンキロサウルスを乗りこなす原住民に出会ったことがある。だが、そのとき彼は私を殺したがっていたため、アンキロサウルスを捕獲し調教した方法について質問することはできなかった。

アパトサウルス

ディプロドクス科。アパトサウルスは、長い間、また今でも広くブロントサウルスとして知られている。外の世界ではアパトサウルスは決して最大の恐竜とは考えられていないが、ここイーオドンの谷で見られる恐竜の中では最大である。体長は25～55メートル、体重は30～35トンにも達する。一般的な学説に反して（イーオドンの谷がそれを証明しているが）、アパトサウルスはその生活の多くの時間を水中ではなく陸上で過ごしている。イーオドンの谷のアパトサウルスの場合、陸上で身の危険を感じたときにのみ沼などの水中に逃げ込む。したがって、沼地帯はアロサウルスやティラノサウルスなどの大型肉食恐竜にとっては実に面白くない場所となる。原住民は、アパトサウルスを非常に明快な名称で呼んでいる。直訳すると〝首長〟だ。

アルケロン

カメ目。クリプトディラ亜目。プテロステジス科。現代人である諸君には〝巨大なカメ〟と言ったほうがわかりやすいだろう。白亜紀の後半（6500万年以上前）、アルケロンは体長が４メートル近くにもなる途方もなく大きな海亀だった。イーオドンの谷で私が目撃した種類は淡水性で人間にも馴れていた。適当な量の餌を与えれば従順な動物となる。



デイノニチュス

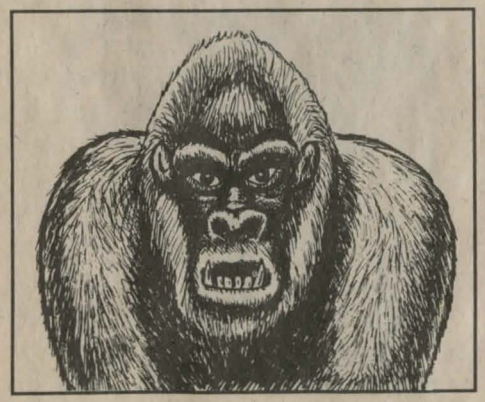
ドロマエオサウルス科。デイノニチュスは、白亜紀の前半（約１億4400万年前）に棲息した機敏な動作で二足歩行する肉食恐竜。体長約3.6メートル、体高約1.8メートルに成長し、体重は人間の大人と同じくらいになる。私がヨラルー族と生活を共にしていた頃、幸運にもデイノニチュスが群れでアパトサウルスの子供を狩る場面を見ることができた。それは実に強烈な印象を私に与えた。将来、デイノニチュスやその他の恐竜の社会構造について、みなさんに報告できればと思う。

ディメトロドン

ペリコサウルス目。分類上は恐竜ではなく、哺乳類と同系列の爬虫類に属する。二畳紀の前半（約２億8600万年前）に棲息していた。４本の足で這うように歩き、体長約４メートル、体重約200キログラムに成長し、背中に体温調節のための船の帆のように膜を張って広がる刺状の突起がある。大変に強い顎を持ち、一度敵に噛みつくと敵が息絶えるまで放さない。イーオドンの谷では、ディメトロドンは明け方に狩りをする。夜明け直後に獲物を捕るが、それに失敗すると、その日は一日腹を空かせて過ごす。

ギガントピテカス

類人猿科。立ち上がると体高約3.5メートルにも達し、足跡からの計算が正しいとすれば、体重は400キログラムにもなる霊長類である。原住民の呼び名を直訳すると、〝黒い幽霊〟という意味になる。その黒い体毛といつも単独で行動し大変に臆病であることから、そう呼ばれているらしい。ときどき小型の嚙歯類を捕らえて栄養を補うことがあるが、基本的には草食性で他の動物を進んで襲うことはない。ただし、危害を加えたり怒らせたりすると非常に狂暴な一面を見せるため、原住民は大変に恐れている。また、稀に〝紅色幽霊〟と呼ばれる種類も見られるという。それは、ジャングル中を暴れ回り、動物や人を驚かせたり、ギガントピテカスのグループから比較的弱くて小さい〝黒い幽霊〟をさらって、新しいグループを作ろうとするような常軌を逸した行動をとる。ときには、人間もさらうとも言われている。イーオドンの谷では、ギガントピテカスは山の斜面や岩棚を寝ぐらにしている。



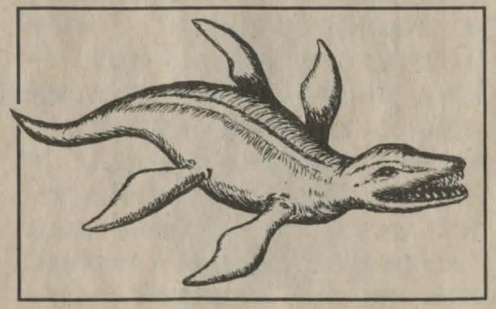
ヒラコテリウム

エオヒップス、あるいは〝ヒノデウマ〟として知られる体長約60センチメートルの小型の生物である。その名前が示すとおり現代の馬の先祖である。始新世前半（約5500万年前）に棲息していた。イーオドンの谷では、ごくありふれた動物である。特に北部の平原地帯に多く見られ、原住民の食糧と毛皮の供給源になっている（大変に多産で逃げ足も速いため、乱獲によって絶滅する心配は今のところない）。

メガテリウム

地上に棲み、現代の象ほどの大きさのあるナマケモノである。現代、木の上で生活しているナマケモノの先祖である。４本の足で歩行し、体長約６メートル、肩までの高さは約1.8メートル、体重は３トンにも達する。イーオドンの谷に棲息するメガテリウムも、外の世界に生きていたメガテリウムとまったく同じである。行動様式も樹上生活をする親類に似て、草食性で動きが遅く、性格はおとなしい。しかし、原住民にとっても恐竜にとっても、メガテリウムを殺すことは難しい。彼らも自分の命を守るために戦う能力を有しているからである。

プレシオサウルス



プレシオサウルス目、プレシオサウルス超科。ジュラ紀前半（約２億年前）に棲息した水性恐竜。この谷の種類は体長６～7.5メートルほどに成長し、狂暴で危険な生物である。外の世界では、体長12メートル以上にも成長する種類があったことから、ここでも、もっと深い水域に大型のものが棲息している可能性がある。沼のような静かな水域に多く棲息しているため、原住民は沼を渡るときには必ずイカダを使用する。また、アパトサウルスやアルケロンを餌などで手なずけてその背中に乗っていくという方法もある。

プテロサウリア

かの有名な空飛ぶ爬虫類もこの谷で多く見ることができる。ジュラ紀前半（約２億1300万年前）から白亜紀の後半（約6500万年前）にかけて棲息した、イギリスのディモルフォドンからアメリカ合衆国南西部のケツァルコアトラスまで、その種類は様々である。それに加えてこの谷には、新たなプテロサウリア種であるスーパープテラノドンもいる。これはあの大きなケツァルコアトラスすら小さく見えるほどの巨大さで、数百キログラム以上の獲物を掴んで飛び上がれる力を持っている。これが、外の世界でまだ発見されていない種類なのか、イーオドンの谷の環境によって独自に進化したものなのかは定かではない。スーパープテラノドンについては、非常に詳しく観察する機会に恵まれたため、学会に詳しい報告を提出したいと思う。そしてもちろん、発見者の特権として正式にこの種に名前を与えたいと思う。

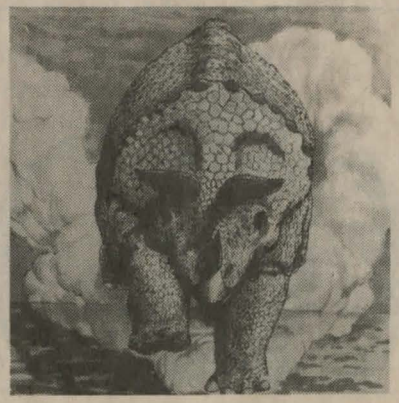
スミロドン

ネコ科。更新世後半（約１万年前）に棲息した動物で、サーベルタイガーの原型である。ハークール族と同様に、イーオドンの谷の環境のおかげで、彼らは外の世界の現実ではなく、この谷の明るい未来を手に入れたのである。一般には、サーベルタイガーはアラスカアカグマほどもある怪物と思われているが、実際に外の世界に棲息していたスミロドンの体長は1.2メートルを超えることがまずなかった。ところが、イーオドンの谷で私が目撃したスミロドンはどれも外の世界の種の４倍の大きさがあった。この谷のスミロドンの性格は残忍かつ獰猛である。非常に攻撃的で、少しばかりの悪知恵も働く。獲物に致命傷を与えて、あとはそれが死ぬまで離れて見ていると言われているが、それも彼らの作戦のひとつなのである。

ステゴサウルス

ステゴサウルス科。ジュラ紀後半（約１億4400万年前）に棲息した、体長約7.5メートル、体重は約４トンの恐竜である。草食性で背中に脊柱が発達した骨質板が並び、尾の先には、強力な武器となる鋭い突起が数本突き出ている。この骨質板が身を守るためのものなのか、単に体温調節のための器官なのかをここで論議することができない。なぜなら、彼らは観察しようとする私を近寄らせてくれないからだ。しかし、クーラック族の原住民はトンガリ歯（ティラノサウルス）はステゴサウルスを襲うときには、慎重に骨質板を避けると教えてくれた。そのことから、骨質板には明らかに防衛機能があると思われる。

トリケラトプス



白亜紀後半（約7000万～6500万年前）に棲息した、盾のような頭から攻撃的な３本の鋭い角の突き出た絵や映画でお馴染みの恐竜である。目の上に生えた角は個体によっては１メートル以上にも伸びたものがある。草食性で、体長は９メートル、体重は10トン前後と思われる。イーオドンの谷では、トリケラトプスは森や草原を群れで移動し、豊かな食生活を送っている。肉食動物に襲われた場合は、集団でこれに対抗する。

ティラノサウルス

ティラノサウルス科。白亜紀後半（約6500万年前の恐竜絶滅期）に棲息し、二足歩行をする肉食恐竜である。体長は18メートル近くあり、アロサウルスよりもやや背が高い（もしかすると、そう感じられるだけなのかもしれない……、いつか正確に比較測定しなければならないと思う……喰われずにそれができればだが）。体重はアロサウルスの約４倍の８トンにも達する。

谷の原住民の間で使われているティラノサウルスの名称は直訳すると〝トンガリ歯〟となる。イーオドンの谷で観察する限り、ティラノサウルスは行動が機敏で、高い知能を持つ肉食動物だ。原住民の話しによれば、獲物を捕るときは木や岩棚の陰に隠れて待ち伏せし、獲物を見つけると吠え声をあげながら全速で襲いかかる習性があるという。巨大で恐ろしい怪物である。

ティラノサウルスの頭蓋骨を調査した結果、この谷に棲息する種類の頭蓋骨の構造には遺伝上発生した致命的な欠点があることがわかった。たとえば、頭の上に適当な高さから適当な大きさの岩石を落としたようなある程度の衝撃が頭蓋骨に加わると、恐らくティラノサウルスは一発で死んでしまう。あくまでも、私の計算が正しければの話だが。

ウルサス・スピラエウス

ウルサス科。大型の〝洞窟グマ〟が外の世界に最初に現われたのは、約200万年前の更新世であり、氷河期を生き長らえた。大きなクマだったが、今日の大型のクマと、さほど大きさは変わらない。イーオドンの谷で見られるクマは昆虫の幼虫や植物を食べて慎ましく生きているが、原住民の話では、怒らせると人間などは簡単に殺してしまうとのことだ。

さて、私の話はまだ終わりではない。あと二つ、イーオドンの谷の最も興味深い〝動物の生態〟を紹介しないわけにはいかないのである。サックラーとミルミデックスだ。

サックラー

サックラーは二足歩行する恐竜類である。体高は150～180センチメートル、平均的な体重は65キログラム前後。こんなことを発表すると、私の同胞である科学者たちはびっくり仰天し、私は冷笑の的になること間違いないが、彼らは感情を持ち、言葉を話し、石を削って武器を作る知識と技術を持っている。文化的習慣に従って生活し、谷の人間の言葉を学び話す能力もある。明らかに彼らは二足歩行恐竜が進化したものだ。恐らくドロマエオサウルスあたりがその先祖として最も有力ではないかと思う。頭蓋には刺状突起があり、これは警告のための器官であり、第二次的に性的アピールのための器官でもある。ドロマエオサウルスの鎌のような後足の鉤爪はサックラーには痕跡しか残っていない。

ミルミデックス

ミルミデックスは昆虫だが、外の世界では決して見ることのできない種類である。ミルミデックス（これは原住民の話を記録した資料から私が翻訳して命名した）は、アリに似た肉体的、また社会的な構造を有している。アリと異なるのは、体の大きさが人間ほどもあるということだ。一般的な四角四面な論理からすれば、これもうさん臭い話に聞こえるだろう。だが、彼らは実在する。彼らの親戚と思われるアリと同様に、非常に狂暴で恐ろしい生き物なのである。イーオドンの谷では、ミルミデックスは最も危険な生物であり、そのアリに似た残忍性と持久力を増大させるための知性の存在すら伺えるのである。

イーオドンの植物

マローン君のメモ帳に残された私の持ちページが残り少なくなったことに危機感を覚えつつ、私はこれ以降、概略のみを記すことにする。

イーオドンの谷は様々な地形のごった煮のような場所だが、その中心は地理的にも興味的にもジャングルである。ジャングルには、恐らくジュラ紀から白亜紀にかけての植物を広範囲にわたって保持し続けている。それは明らかに熱帯雨林であるが、外の世界のどの熱帯雨林とも違っている。

石炭紀の巨大なトクサの仲間、二畳紀のみごとなシダ類、ジュラ紀の大型松柏類、白亜紀の現代的な草花や熱帯樹などが豊かに成長し、肩を並べて茂っている。付け加えるに、多くの植物が外の世界のアマゾン川流域に繁殖している植物と同一であることから、イーオドンの谷は南米のどこかに存在しているのではないかと思えてならない。

しかし、谷の北部では、地形が突然に高原になり、トウモロコシや現代の草が茂っている。谷の南東部では、岩が多く植物は少ない。火山が支配する土地であるため、むしろ火山学者の天国と言えよう。また、豊かなウラリの沼地帯はジュラ紀の沼沢性松柏類の小世界を形成している。

イーオドンの将来

イーオドンの谷で起こった最近の出来事がきっかけとなって、ここもすぐに現代人に発見されてしまうことは避けられない。営利主義者や政治家たちにこの谷のことが知れるのも時間の問題だ。そうなれば、科学者や自然保護団体は、イーオドンの谷の奇妙で豊かで非常に傷つきやすい自然が開発業者や利益団体によって破壊されないよう、素早い行動を取ってくれるものと確信している。

あらゆる分野の科学者がここを訪れ、この谷の動物、植物、地質について調査分類する必要がある。人類学者や考古学者はここの知的住民について同様な調査と分析を行うべきである。連邦政府はイーオドンの谷がどの国の中に位置していようとも、すべての調査が終了するまでいかなる開発も資源の持ち出しも禁止する法律を作るように立法府に働きかけるべきだと、私は強く訴える。

Opens April 1, 1993, at a theatre near you!

See! Deadly Dinosaurs From the Dawn of Time!
See! The Menace of the Monstrous Mymidex!
See! Love Blossom In a Forgotten Land!

Lord British Presents • A Jeff Johannigman Production
A Stephen Beeman Film "The Savage Empire"
STARRING
Richard Corlane • Byron Swade
and Faith Selburn as Aiela

Casting by Keith Berdak and Glen Johnson
Cinematography by Jason Templeman and Bob Quinlan
Production Design by Dan Bourbonnais and 'Manda Dee
Original Musical Score by the Fat Man
Screenplay by Aaron Allston

WILD BASIN Expedition Returns

ワイルド・ベイスン探検隊……(左下から時計回りに) キース・バーダック、ジェフ・ジョアンニグマン、ジェフ・ディー、マーク・シェフゲン、デニス・ルーベット (後ろ)、アーロン・オルストン、マンダ・ディー、フィリップ・ブログデン、ジョン・ワトソン、ジェイソン・テンプルマン (後ろ)、ボブ・キンラン、ジョージ・サンガー、グレン・ジョンソン、マイク・ロメロ、リチャード・ガリオット、スティーブン・ビーマン。(ダン・ブルボネは写っていない)

ワイルド・ベイスン探検隊帰還す

文/ジミー・マローン

事業家リチャード・ガリオットが、新作映画「サベージ・エンパイア」の製作スタッフにプレゼントを贈った。映画でも多くのロケーションを行なったことのある、独特の雰囲気を持つヒルカントリーへの探検旅行だ。しかしそれが、危うくスタッフ全員を帰らぬ人にしてしまうハメになろうとは、ガリオット自身も知らなかった。

6月1日、探検隊はテキサス州オースチンにあるガリオット所有の娯楽製作会社の本社を出発した。映画の主要な場面をすべて撮り終えて間もなくのことだった。それから2週間、無線による陽気な定期報告が毎日入っていたが、6月15日を最後に探検隊からの報告は途絶えてしまった。

それから30日間、ガリオットと幹部スタッフは夜も寝ずに無線機と向かい合い、手の甲を噛みながら、ヒルカントリーのワイルド・ベイジンへ救助部隊を出動させるよう政府に繰り返し要請し続けた。

6月27日、リチャード・ガリオットの要請を受けて政府の救助隊が出動。救助隊はすぐに探検隊のベースキャンプを発見した。テントが張られ、様々な道具はいつでも使える状態になっていた。しかし、それから2週間経っても、彼らはそれ以上の探検隊の手掛かりを見つけ出すことができなかった。

7月16日、救助隊のメンバーが目を覚ますと、彼らのキャンプにワイルド・ベイスン探検隊がいた。食糧の貯蔵所を引っ掻き回す者、ロープと防水シートで即席のバレーボールコートを作る者、とにかくやかましくて救助隊は眠りから覚まされてしまったのだ。

「ほんとうに驚いたよ」ガリオット救助隊の隊員は語った。「服はボロボロ。オレたちのキャンプはエアコンが効いてないって文句を言ってたが、それ以外は問題なさそうだった。三馬鹿大将のギャグを真似るヤツや、〝スターウォーズ〟のどの映画が一番よかったかで喧嘩しているヤツなんかもいたよ」

彼らはいったい、1カ月もの間、何をしていたのだろうか。そして、どうやって生き長らえていたのだろうか。探検隊メンバーのインタビューから驚くべき事実が浮かび上がった。

未開地に踏み込む

スティーブン・ビーマン (21歳)。探検隊のリーダーであり、映画「サベージ・エンパイア」の監督でもある彼はこう語った。「何週間か未開地で過ごした頃、私以外のメンバーはみんな探検に飽きてしまったようだった。私はすることがあったので、自分のテントにこもってたんだが、私が何をしているのか気になるらしく、2分ごとに誰かが『パーティーするよ！』とか言いながら私のテントを覗きに来た。私はたまらなくなり、彼らの体から溜まり過ぎたエネルギーを抜くために、そして、私が監督することになっていた『メイキング・オブ・サベージ・エンパイア』のロケ地を探すために少し散策することを提案した。そうして私たちは出発したのだが……何もかもアーロンのせいだ」

アーロン・オルストン (29歳)。映画「サベージ・エンパイア」のスクリーンライター。彼はビーマンの指摘を認めて、こう語った。「オレの方向感覚は100パーセント正確なんだ。ただし、50パーセントの確率でね。あの日はダメな50パーセントの側だったんだな。オレたちは迷っちまって、そりゃ楽しかったよ。キース (バーダック) が蛇に噛まれたのは災難だったがな。オレたちは、ドでかいサソリを追いかけていったんだ。どれだけでかいかって言うと、そうだなぁ……でかいサソリほどもあったな。だけど、途中でキャンプに戻ったほうがいいってことになって帰ったんだが、キャンプが消えていたんだ。間違いない。誰かが勝手に動かしやがったんだ」

「そこでオレたちはキャンプを探してそこら中を歩き回ったんだ。ジョアンが木に登って遠くを見てくれたんだが、ヤツはそのとき歯ぎしりをしてこう叫んだ。『オレたちはキャンプからすぐのところにいたんだ！　今からオレがリーダーになる』それでも、オレたちは帰れなかった」

それぞれのリーダーシップと方向感覚の正確さを競い合う、アーロン・オルストン (シナリオライター)、ジェフ・ジョアンニグマン (プロデューサー)、リチャード・ガリオット (エグゼクティブ・プロデューサー)、スティーブン・ビーマン (監督)。

ジョアンことジェフリー・ジョアンニグマン(29歳) は映画「サベージ・エンパイア」のプロデューサーであり、探検隊の副隊長である。がっしりとした体格、ブロンドの髪、青い目のアーリア人で、ハリウッドで最も扇動的なプロデューサーの一人として成功している。彼は探検中に起こった出来事を無表情にこう回想した。「この探検は私のスケジュールにはなかったことだ。それがうまくいくとも思っていなかった。私は私たちの予定のすべての段階で必ずスケジュールがずれていくと予想していたが、それに加えて、手に負えないライターやアーティストどもだ。したいようにさせておいたら、案の定、我々全員が巻き添えをくった。次は、連中が森の中を走り回ってもかかわらずにいようと思う。ビデオでエロール・フリンの映画でも見てるさ」

原住民に遭遇する

ダン・ブルボネ (36歳) は映画「サベージ・エンパイア」の主任セットデザイン・スーパーバイザーであり、ストーリーボード画家でもある。美術と建築の両方の経歴があり、優秀な技術の持ち主である。この探検隊では写真家として参加しているが、実は、ヒルカントリーで半ば伝説的に語られている原住民に遭遇することを密かに望んでいた。そして、彼の望みは彼が期待していた以上の形で叶えられることになったのだ。

彼は言葉少なに語った。「オレたちは道に迷い、マヌケみたいにあちこち歩き回った。『待て！　見覚えがあるぞ』とアーロンが言うたびに、ヤツはオレたちを新たな間違った方向に導いたんだ。ジョアンは足を踏みならして『上等だ！　最高だよまったく！』と叫び続け、社員規約書と首っ引きで、問題の対処法を探していた。スティーブはジョアンの後ろから彼をからかっていた」

「そうして、干上がった川床を1周したとき、彼らがそこにいたんだ。原住民さ。10人くらいの男女だった。彼らは火をおこしていた。火の上には素朴な格子を乗せて、何かの肉を焼いていた。肉

は真黒に焦げていた。オレは写真を撮り始めた。するとヤツらはこっちに気付いて……手を振ったんだ。敵意は感じられなかった」

マンダ・ディー（23歳）は映画「サベージ・エンパイア」の妖精のようなセットデザイナーであり、セットデザインでのブルボネのパートナーでもある。彼女はブルボネの言葉を受けて言った。「原住民はみんなとても親切だったわ。とってもワイルドな人たちで、錆びた金属でできた二輪の車の背中に乗って走り回ったりするの。底抜けに陽気な人たちでさぁ、何か発酵させたみたいな醸造酒みたいなものを飲んでたけど、それ、すごく頭にひびいたわ。私たちが最初に出会った原住民は、何だか儀式的な野外料理をしてたの」

「私も宗教的儀式に協力しなきゃと思って、広い空き地に石の滑走路を作る手伝いをしたの。ナスカの地上絵みたいなやつよ。わかる？　空の神様が降りる場所よ。私たちは20メートルぐらいのアルマジロの形をした滑走路を作ったわ」彼女は何かを思い出そうと言葉を止め、こう付け加えた。「……って言うか、それを作ろうって言い出したのは私なんだけど、みんな協力的だったわよ」

ジェイソン・テンプルマン（23歳）は映画の脚本コンサルタントであり、幅広い戦闘シーンの殺陣師でもある。探検隊では、炊事係を無理やり任されていた。彼はこう語った。「その原住民たちには変わった習慣があったんだ。彼らはよくヒルカントリーのいろいろな場所へ泳ぎに行くって言うのさ。ある場所では裸でいいんだけど、別の場所では小さい布切れを身につけなきゃいけないんだとさ。どうして、場所によって違うのか、ボクにはわからなかった。彼らもハッキリとは話してくれなかった。だからボクはただ立って、何が違うのかを知ろうと思って、じっと見ていたんだ。そのときだ。キース・バーダックがそっとボクに近付いてきて、ボクのズボンの中に蛇を入れたのは」

未開地での生活

キース・バーダック（35歳）。映画「サベージ・エンパイア」の主任キャスティング・ディレクターである。彼はこう語った。「映画に出てくるほとんどの顔は私が決めた。ただし、〝かわい子ちゃん〟を演ずることになった相棒のグレンは別だ。ラッキーな野郎だよ」バーダックは探検旅行の話には

ジェイソン・テンプルマン（プログラマー）とマイク・ロメロ（プレイテスター）に蛇の扱い方を披露するキース・バーダック（画家：中央）。

最初から乗り気ではなかったと言う。「私は蛇がダメなんだ。でもなぜか、私の人類学と考古学の先生であるカレン・E・ベル博士は私も行くべきだって強く薦めたんだ。彼女は映画「サベージ・エンパイア」の専門分野での相談役でもあったんだが、私は彼女に感謝している。お陰で、いろいろな物を見させてもらったよ。特に、文明社会では二度と見られないような様々な生物さ」

そこで彼は急に言葉を止めた。何かを地面から素早く拾いあげ、のたくる蛇の顔を私に突きつけた。「ほら、これなんか面白い蛇だよ。猛毒を持つオーストラリア・タイガー・スネークによく似てるけど、これはすごく人なつっこいんだ。痛てぇっ！　咬みやがったな、こんチクショー！」

これでバーダックとのインタビューは続行不能となったが、医療係の話では大したことではないとのことだった。

危険な生物もいたが、未開地では飢えが危機的状態にまで深刻化することはなかったようだ。ファットマン……映画「サベージ・エンパイア」の音楽を作曲した作曲家のペンネーム……は、臭い葉巻きをふかすツルツル頭の大男である。攻撃的な性格で不自然なほどに頭が小さい。彼はこう説明してくれた。「この探検で一番よかったのは食い物だな。あの原住民の食事は死ぬほど旨かった。毎日ピクニックさ。肉のローストにバーベキューに、もう最高！」

彼の大きなゲップで話は一時中断した。彼はニヤリと笑って頭を振り、音楽的に単調なゲップの音に色を添えた。「とにかく、オレが外に出たいと思うときは、いつだって食い物が目的なんだ。食い物と女かな。こんな何もない土地へ男を探検に出せるのは、女しかいねーもんな。ヨットなんざ、オレにとっちゃ腹ごなしさ」そして彼は前の話題に戻った。「それで、オレはヤツらの祈とう師に言ってやったんだ。これで頭が小さくなれば言うことないんだけどねって。……あ、オレちゃんと〝頭数〟って言わなかったっけかな」

「サベージ・エンパイア」のプロモーション用ポスターの作家デニス・ルーベット（33歳）は、こう話している。「そりゃあ、なんとも奇妙なところだったよ。ここには、ちょうどいい材木が十分にないらしくって、原住民はガラスの板で崖のように切り立った家を作って住んでるんだ」

映画のサウンドエフェクトの専門家マーク・シェフゲン（20歳）は、こう話している。「またすぐ探検旅行をしたいね。それほどひどくはなかったよ。道に迷ったのと、ファットマンと音楽のことで喧嘩ばかりしていたのと……僕はギタリストなんだけど、料理もするんで何か作ってやったときは彼もいい人だった……、スティーブン・ビーマンがいつも歩き回っていて、『寝るな！　寝るのは弱虫だ、歩け！』って叫び回っていたことを除けばね。あいつらは、次の旅行には連れていかないことにしよう」

帰還

「そこで何週間か過ごしたとき、原住民が教えてくれたんだ」映画の台詞のコンサルタントをしているフィリップ・ブログデン（30歳）はこう語った。「ボクたちの他にもうひとつの探検隊のパーティーがすぐそこに来てるって」

そこで、ビーマンの主任アシスタント、ボブ・キンラン（29歳）はそれを否定した。「違う違う。原住民は、パーティーに招待したい探検隊がもっといるって言ってたんだ」

「ああ、そうかもな」ブログデンは話を続けた。「ビーマンは、ここから出られるチャンスだと考えたんだ。ジョアンはその頃には原住民と暮らすことを真剣に考えていたみたいだけど、ビーマンは一層強硬になって、鞭を鳴らして、来ないヤツはクビだって脅したんだ。ファットマンはと言うと、本当に全員をクビにしてしまった。でも彼に雇われている人間はひとりもいなかったから、よかったよ。とにかく、ビーマンは再びボクたち全員を未開地に向かわせたんだ。そして、また迷っちゃった」

キース・バーダックと共にキャスティング・ディレクターを務めたグレン・ジョンソンは、こう話している。「恥ずかしいったらないよ。オレはどっちかって言うと、次の映画では原住民の役をやりたいね。あの部族には、本当の美人……オレたちの会社の符丁でいう〝かわい子ちゃん〟……がいたっけなぁ」

映画のストーリーボード画家であり、マンダ・ディーの夫であるジェフ・ディーはこう言っている。「オレはビーマンをからかうので忙しくてね。あいつの両親はこの地方の出身なんだってね。本人は認めようとしないさ。だって、じゃあなんで、ここから脱出する道ぐらいわからなかったのかって、みんなに責められちゃうだろ。で、あるとき、ジェフ（ワトソン）が太陽やらコンパスやらを見ながらオレたちの行程を細かく地図に描き記してたのに気が付いたんだ。そして、ヤツの地図を見たら、オレたちのベースキャンプから今までの行程が全部描いてあった」

「いつから描いてるんだって、ジェフにボクは聞いたんだ」映画「サベージ・エンパイア」に登場する地図やグラフィックを担当したジェフ・ワトソンが口を挟んだ。「だからこう答えたんだ。『出発してからずっとだよ。帰ってからこの探検のイラストを描くときに使えるかもしれないと思ってさ』ってね。みんな見に来たよ。そして、叫ぶような声が聞こえて、ボクは目の前が真っ暗になった。

蛇の扱い方を披露していたキース・バーダックの脈をとるジョン・ワトソン（ワールド設計者）、グレン・ジョンソン（画家）、フィリップ・ブログデン（作家）。

目を覚ますと、ボクは体中が傷だらけだった。特に頭がね。ボクはみんなに運ばれてベースキャンプに向かっているところだった。そしたら、そこに救助隊がキャンプを張ってたのさ」

こうして消息を絶っていた探検隊は発見された。15人のメンバー全員が生存しており、蛇の毒に冒されたバーダックを除いて全員が健康だった。このレポートが印刷される頃には、ワイルド・ベイジン探検隊のすべてのメンバーが無事に家に帰っていて、新しい映画の仕事にかかっていることだろう。そして、次の探検旅行の計画に思いを巡らせていることだろう。

ちょーっと待ったぁ

サベージ・エンパイア・クルーブックの宣伝だっ!

あの多次元的に有名なローカス・クルーブック・シリーズからサベージ・エンパイアのクルーブックが出るぞ。

こんなワケのわからない世界に放り出されて、クルーブックもなしに何ができるってんだ。けっこうできるかもね。でもさ、ホレ、あったほうがずーっと楽しいわけよ。いろいろと奥の深いところまで見えたり、あんな技まで使えたり、こんなところでアレができたり……、おーっとオシャベリは地面に穴を掘るもんだ(そりゃシャベルよん:ミルミデックス注)。これさえあれば、キミもイーオドンオタク。ノーベル頑張ったで賞ぐらいは取れるかもしれない。

とゆーわけで、ゲームなんかしなくてもいいくらい、すべてが詳しく書かれたクルーブックがローカスから発売されるってこと、よーく覚えておいてちょーだい。

それまでゲームを終わらせるなよ。終わりそうになったら、ちょっと待っててね。クルーブックがあれば大丈夫だから。

サベージ・エンパイア・クルーブックのお問い合わせは
株式会社 ローカスまで TEL:03-3837-1102

★定価¥1,800(税込)

PONY CANYON INC.

F98 F 5558
L98 F 5558